

影浦谷古墳

1993

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

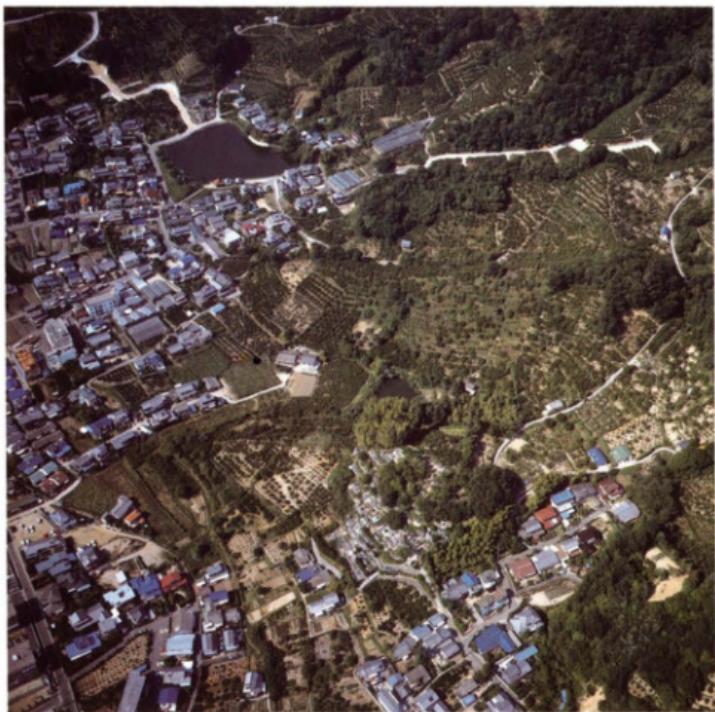
影浦谷古墳

1993

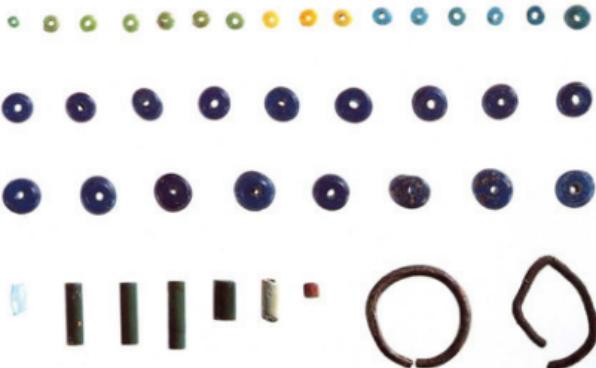
松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財團

埋蔵文化財センター



卷頭図版Ⅰ 影浦谷古墳周辺の航空写真



卷頭國版2 1号墳出土装身具

序

松山平野の北東部にひろがる高繩山系の南西麓には、弥生時代の遺跡や古墳が数多く分布いたしております。松山市では、その一角に新たに小学校を設けることになりました。この報告書は、これにともなう事前発掘調査の成果をまとめたものであります。

調査地は、その南に文京遺跡に代表される弥生時代から古墳時代の大規模遺跡群、道後城北遺跡群をひかえ、また西方の眼下には弥生時代の木製農具の出土から、原始・古代の生産域としての可能性を指摘されている沖積低地を見おろすといった古墳の立地には非常に条件のよいところであります。

発掘調査は、一年余りの期間をかけて行われ、特徴的な構造を持つ横穴式石室の検出や、松山市域では二例目の盾形埴輪の出土、そのほか後期古墳にまつわる大きな知見を得ることができました。從来、この地区の古墳に関しては不明な部分が多く、今回の調査成果はこの地区のみならず、松山平野全体の古墳を考えるうえでも貴重な資料となるものです。こういった成果をあげることができましたのも、地元関係各位の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力のたまものであります。紙面をお借りして、あらためて厚く感謝申し上げます。

なお、本書が、今後各方面にわたってご利用いただければ幸いに存じます。

平成5年3月31日

財團法人 松山市生涯学習振興財團

理事長 田中誠一

例　　言

1. 本書は、財団法人 松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センターが、平成4年4月から平成5年3月にかけて実施した、松山市山越3丁目・姫原1丁目所在の松山市有地内における発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、松山市立清水小学校分離新設に伴う事前調査として実施された。
3. 遺物の実測・製図、遺構の製図は栗田茂敏、大森一成、小坂ゆかり、丹生谷道代、三好麻紀が行った。
4. 遺物図の縮尺は、須恵器1/3、埴輪・弥生土器1/4、鉄器・鉄製品・石器・装身具1/2とすることを原則とし、これをはずれた図には縮分値をスケール下に記した。
5. 遺構の撮影は、栗田茂敏、大西朋子が、また、遺物の撮影は大西朋子が行った。
6. 使用した方位は磁北である。
7. 本書にかかる遺物・記録類は松山市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
8. 調査に際しては、田辺昭三（京都造形芸術大学）、田崎博之（愛媛大学）の両氏のご指導を得、また、工楽普通・肥塚隆保（奈良国立文化財研究所）の両氏のお手をわざらわせてガラス製品の分析を行っていただいた。記して感謝申し上げます。なお、分析結果は、第Ⅳ章にまとめられている。
9. 本書の執筆・編集は栗田茂敏が行った。

本文目次

I 影浦谷古墳をめぐる環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
II 調査の経過	6
1. 調査に至る経緯	6
2. 調査組織	6
III 調査の成果	8
1. 試掘調査	8
(1) 調査地の現況と調査の方法	8
(2) 調査の結果	8
2. 1号墳の調査	11
(1) 墳丘	11
(2) 横穴式石室	15
(3) 石室内の遺物出土状況	20
(4) 石室内出土の遺物	20
(5) 墳丘裾部出土の埴輪と須恵器	25
(6) 弥生時代の遺構と遺物	32
3. 2号墳の調査	35
(1) 墳丘	35
(2) A主体部	35
(3) B主体部	43
(4) 箱式石棺	47
(5) 弥生時代の遺物	50
4. 3号墳の調査	52
(1) 墳丘	52
(2) 横穴式石室と遺物の出土状況	52
(3) 石室内出土の遺物	54
(4) 包含層出土の弥生土器	56
IV 影浦谷1号墳出土ガラスの分析	58

図 目 次

図1 調査地の位置と周辺の主な遺跡	3
図2 調査地の全測とトレンチの位置	9
図3 調査前の1号墳丘	11
図4 1号墳丘実測図	12
図5 1号墳丘断面図	13
図6 1号墳石室平面図	16
図7 1号墳石室展開・遺物配置図	17
図8 1号墳石室礎床	19
図9 1号墳石室内出土須恵器	21
図10 1号墳石室内出土鉄製式具・農工具	22
図11 1号墳石室内出土馬具	23
図12 1号墳石室内出土玉・環類	24
図13 SX-1 墓輪出土状況	25
図14 SX-2 墓輪出土状況	25
図15 SX-3 墓輪出土状況	26
図16 1号墳丘裾部出土円筒埴輪(1)	27
図17 1号墳丘裾部出土円筒埴輪(2)	28
図18 1号墳丘裾部出土盾形埴輪	29
図19 1号墳丘裾部出土須恵器	32
図20 SK-1 遺物出土状況	33
図21 SK-1 出土弥生土器	33
図22 SK-1 出土石庖丁	34
図23 調査前の2号墳丘	36
図24 A主体部横穴式石室	37
図25 A主体部礎床	38
図26 A主体部展開・遺物配置図	39
図27 A主体部出土須恵器	40
図28 A主体部出土鉄製品・玉	41
図29 試掘調査出土須恵器	42
図30 B主体部礎床と玉類の出土位置	44

図31	B主体部平面・展開図	45
図32	B主体部出土玉類（1）	46
図33	B主体部出土玉類（2）	47
図34	2号墳箱式石棺	48
図35	箱式石棺展開図	49
図36	調査後の2号墳丘	50
図37	包含層出土弥生土器	51
図38	包含層出土石斧	51
図39	調査前の3号墳丘	52
図40	3号墳石室と遺物の出土状況	53
図41	3号墳石室内出土須恵器	55
図42	3号墳石室内出土耳環	55
図43	調査後の3号墳丘	56
図44	包含層出土弥生土器	56
図45	御産所櫛現山1号墳横穴式石室	60
図46	松山平野の堅穴系横口石室	61

図 版 目 次

巻頭図版 1 影浦谷古墳周辺の航空写真

巻頭図版 2 1号墳出土装身具

- 図版 1 影浦谷 1号墳 1 A区丘陵 1号墳遠景（北東E区より）
調査前 1号墳丘（北西より）
- 図版 2 影浦谷 1号墳 2 墳丘擾乱壙の検出（南西より）
擾乱壙の掘り下げ（南西より）
- 図版 3 影浦谷 1号墳 3 主体部背後の封土の状況（北西より）
墳丘の断ち割り（北東より）
- 図版 4 影浦谷 1号墳 4 粘土床の検出（南西より）
粘土の被覆状況（東より）
- 図版 5 影浦谷 1号墳 5 砥床面の検出（1）（南西より）
砥床面の検出（2）（南西より）
- 図版 6 影浦谷 1号墳 6 砥床面の検出（3）（南より）
直刀出土状況

- 図版7 影浦谷1号墳7 短頸壺出土状況（1）
短頸壺出土状況（2）（南西より）
- 図版8 影浦谷1号墳8 石室完掘状況（1）（南西上方より）
石室完掘状況（2）（南西より）
- 図版9 影浦谷1号墳9 奥壁の状況（南西より）
南西側壁の状況（南より）
- 図版10 影浦谷1号墳10 北東側壁の状況（北西より）
S X-2 墓輪出土状況（1）（北東より）
- 図版11 影浦谷1号墳11 S X-2 墓輪出土状況（2）（北より）
S X-3 墓輪出土状況（1）（南東より）
- 図版12 影浦谷1号墳12 S X-3 墓輪出土状況（2）（東より）
弥生土壙SK-1 遺物出土状況
- 図版13 影浦谷1号墳13 1号墳出土須恵器・菱身具
- 図版14 影浦谷1号墳14 1号墳出土鉄製品
- 図版15 影浦谷1号墳15 1号墳出土円筒埴輪（1）
- 図版16 影浦谷1号墳16 1号墳出土円筒埴輪（2）
- 図版17 影浦谷1号墳17 1号墳出土盾形埴輪（1）
- 図版18 影浦谷1号墳18 1号墳出土盾形埴輪（2）（前面）
- 図版19 影浦谷1号墳19 1号墳出土盾形埴輪（3）（背面）
- 図版20 影浦谷1号墳20 SK-1 出土遺物
- 図版21 影浦谷2号墳1 E区丘陵遠景（西より）
E区丘陵より北西方向を望む
- 図版22 影浦谷2号墳2 A・B主体部、箱式石棺の検出（北より）
石室・石棺の配置（西上方より）
- 図版23 影浦谷2号墳3 A・B主体部の配置（西上方より）
A主体部礎床面の検出（西より）
- 図版24 影浦谷2号墳4 A主体奥壁部の遺物出土状況（1）（北西より）
A主体奥壁部の遺物出土状況（2）（北西より）
- 図版25 影浦谷2号墳5 B主体部礎床の検出（西より）
B主体部玉類の出土状況（1）
- 図版26 影浦谷2号墳6 B主体部玉類の出土状況（2）
B主体部完掘状況（西より）
- 図版27 影浦谷2号墳7 箱式石棺検出状況（1）（北より）
箱式石棺検出状況（2）（東より）

- 図版28 影浦谷2号墳8 箱式石棺完掘状況（1）（北より）
箱式石棺完掘状況（2）（上空より）
- 図版29 影浦谷2号墳9 A主体部出土須恵器
- 図版30 影浦谷2号墳10 試掘調査出土須恵器、A主体部出土鉄器・玉
- 図版31 影浦谷2号墳11 B主体部出土玉類
包含層出土弥生遺物
- 図版32 影浦谷3号墳1 石室の検出（北西より）
石室床面の検出（1）（南西より）
- 図版33 影浦谷3号墳2 石室床面の検出（2）（北西より）
須恵器の出土状況（1）
- 図版34 影浦谷3号墳3 須恵器の出土状況（2）（北より）
耳環の出土状況
- 図版35 影浦谷3号墳4 3号墳石室内出土須恵器
- 図版36 影浦谷3号墳5 3号墳石室内出土耳環
包含層出土弥生土器

I 影浦谷古墳をめぐる環境

1. 地理的環境

影浦谷古墳は、松山平野の北東部を限る高繩山系の南西麓にあたる丘陵上、標高40~70mに位置して、松山市山越町、姫原町の両町にまたがって分布している。現在、平野を北東部から南西方向に流れる石手川は、この高繩山系に源を発し、扇状地を形成した後、重信川に合流し、伊予灘に注いでいる。西方の眼下にひろがる平野部は、遺跡の立地する高繩山系と西方海岸部の太山寺山塊とに挟まれた南北約7km、東西約2kmの低地となっているが、上述の石手川の旧流路は、現在とは異なり、現流路よりも約2km北方の高繩山系南面にあたる御幸寺山塊を西流し、その山麓に沿って北方に流路を振り、堀江湾に注いでいたものとされており、低地はこの河川活動によって形成された地溝性の沖積低地と河岸段丘とによって成り立っていると考えられている^①。この低地部の標高は17~19mということであるから、比高差約20~50mの丘陵尾根沿いに古墳が立地することになる。丘陵上からの眺望は、平野北部から西部を経て南部にまで開け、北部の堀江・和気から南東部の松前・伊予市の海岸線までを一望のもとにすることができます。

2. 歴史的環境

ここでは遺跡の立地する高繩山系南西麓、あるいは南麓を中心に周辺の遺跡・資料を概観しておくことにする。

旧石器時代の資料としては、祝谷丸山採集の石器群が知られている。かつて細石核、網石刃として資料紹介された、緑色・灰色チャートを原材とする12点の石器類であるが、近年多田仁氏によって再検討され、楔形石器、剥片・碎片としての認定が行われている^②。

縄文時代の遺跡は、この地区ではよく知られていないが、少し隔たって南西1.5km内外の石手川扇状地上にひろがる弥生時代中・後期を盛期とした集落、文京遺跡での縄文後期の屋外炉の検出をはじめ^③、中期の遺物の採集例^④や、その周辺において後・晚期の包含層が確認されている^⑤。また、西北3.5kmの沖積低地上、船ヶ谷町の船ヶ谷遺跡^⑥や、太山寺町大瀬遺跡^⑦は晚期後半の遺跡としてよく知られている。特に、大瀬遺跡では多量の突帯文土器に伴って丹塗り彩文甕をはじめとする壺類、磨製石庖丁、石鎌、櫟圧痕土器等が沼沢地縁辺部に投棄された状態で出土しており、松山平野における稻作農耕の開始を窺わせる遺跡として重要である。

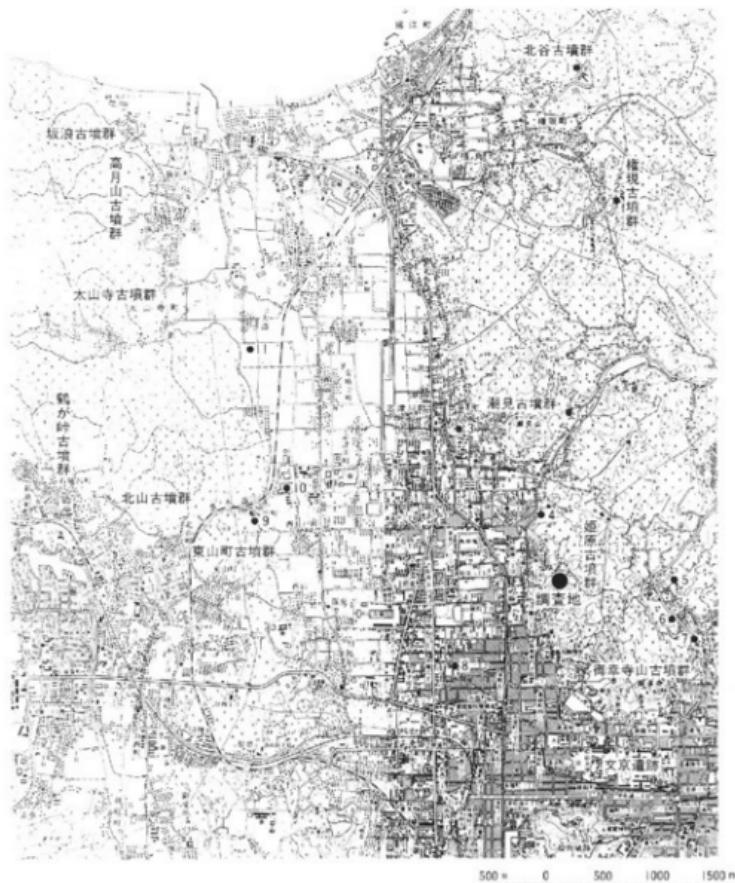
弥生時代の松山平野を論じた下條信行氏は、その地形的完結性と遺跡の密集度を単位とし

て、平野が⁶ないしは7つの遺跡群によって構成されるとしている⁵。上述の文京遺跡を中心とする石手川扇状地上の遺跡群は道後城北遺跡群、船ヶ谷・大瀬遺跡を含む沖積低地上の遺跡群は和氣遺跡群に含まれる。当古墳群はこの両遺跡群の接点ともいべき丘陵上にあって、より沖積低地部を意識した立地となっているが、弥生時代以降、この低地部に営まれた集落は現在のところ確認されていない。集落そのものはあきらかではないが、弥生遺物を出土する遺跡はこの低地や、低地を東方に若干上がった河岸段丘上、丘陵緩斜面に散見される。低地部に位置する山越遺跡⁶2次調査地⁷では、溝状遺構より前期中葉の板鏡や柳葉形磨製石鏡を出土、また丘陵緩斜面の潮見遺跡⁸、宮ノ谷遺跡⁹では前期末から中期中葉の遺物や壺棺の出土をみており、この時代、居住域・墓域の主体を微高地におき、低地部を水田等の生産域としていた可能性は高い。また、同一丘陵の反対斜面にあたる祝谷地区は道後城北遺跡群に属するゾーンであるが¹⁰、この地区には中期に盛期を持ちながら後期まで存続し、埋納状態で平形銅劍を出土した六丁場遺跡¹¹、中・後期の住居址が検出されたアイリ遺跡¹²等が存在する。

弥生時代に関して設定された遺跡群は、古墳時代を経て、最終的には旧郡の単位に集約されていくものと考えられる。『和名抄』の記述によると、古代松山平野の旧郡は、和氣・温泉・久米・伊豫の4郡に浮穴郡の一部とされている。この古代旧郡を安易に古墳時代に援用すべきではないのは当然であって、郡界の復元、また想定されるそれぞれの郡域内における拠点的集落の動態、首長墓系譜が検証されなければならない。このような要件がいくらかでも満たされているのは、重信川左岸の伊豫郡、重信川右岸、石手川左岸の久米郡の平野南部の2郡のみであって、平野北部の地域においては特に集落実態について不明な部分が多い。ここでは、あくまでも便宜的に当古墳がその南東端付近に属すると考えられる和氣郡の想定域での古墳分布についてみてゆく。なお、和氣郡とは弥生時代の和氣遺跡群、および沖積低地西方の海岸部、三津遺跡群の北半の丘陵部とをあわせた部分がほぼこれに相当するものと思われる。

太山寺山塊の北端に近いところ、勝岡町で調査された高月山古墳群¹³は7基の古墳で構成されるが、そのうちの1基、高月山2号墳は水銀朱塗布の箱式石棺を主体部とする小長方墳で、棺外副葬品として、墓壇堀り内方に鉄劍、鏡先、鉄斧等の鉄器を持ち、また、周溝内より布留1式期併行とされる底部穿孔土師器壺、銅鏡1点を出土しており、この地域では最も古い時期の古墳である。なお、調査されたその他の2基の古墳、1・3号墳も箱式石棺を主体部としている。高月山古墳群のさらに北方に位置する勝岡町坂浪古墳群中の1基、塔ノ口山古墳¹⁴も箱式石棺を主体部とし、内行花文鏡、画像鏡の2面の舶載鏡片を出土しているが、詳細は明らかではない。

同じく太山寺山塊には、太山寺古墳群、北山古墳群、東山町古墳群、鶴が峠古墳群が分布しており¹⁵、このうち石風呂町所在の鶴が峠古墳群では、20数基の古墳が調査され、6～7世紀代の大小の横穴式石室、小竪穴式石室や、主体部不明ながら形象埴輪を伴う5世紀末の円



- | | | |
|------------|--------------|----------|
| 1 北谷玉神ノ木古墳 | 5 祝谷アイリ遺跡 | 9 向山古墳 |
| 2 塚本古墳 | 6 祝谷六丁場遺跡 | 10 船ヶ谷遺跡 |
| 3 蓬萊寺舟形石棺 | 7 祝谷丸山遺跡 | 11 大潤遺跡 |
| 4 宮ノ谷遺跡 | 8 山越遺跡 2次調査地 | |

図一 調査地の位置と周辺の主な遺跡

墳が検出されている^①。また、東山古墳群中の向山古墳は削平により、主体部、盛土とともに失われているが、前方後円墳の可能性を残す5世紀末の古墳で、円筒埴輪とともに蓋、鶴、馬等の形象埴輪の出土をみており^②、該期の首長墓であった可能性がある。

一方、当古墳が所在する高繩山系西面の古墳には、北より北谷古墳群、権現古墳群、堂ヶ谷古墳群、瀬見古墳群がある。北方の福角町、権現町の北谷・権現古墳群には北谷主神ノ木古墳^③のような小規模な横穴式石室を主体部とする小円墳とともに、市指定文化財の北谷古墳^④や、塚本1号墳のように巨石を用いた大型横穴式石室を主体部とする後期古墳が多く分布している。塚本1号墳は一辺17~18mの方墳であるが、圭頭太刀、挂甲といった副葬品を出土しており、7世紀前半代の首長墓であると考えられる^⑤。また、瀬見古墳群内の谷町室岡山蓮華寺境内には、その出土状況等の詳細は不明ながら、阿蘇溶結凝灰岩を割りぬいた舟形石棺の身部があり、愛媛県内唯一の割りぬき式石棺の例である^⑥。

古代和気郡は、愛媛大学松原弘宣氏の研究によれば、長岡京出土木簡、「日本書紀」の記述により、7世紀末には既に存在し、また『日本書紀』にみえる「伊豫別君」の存在も、承和年間の円珍によるとされる『和氣氏系図』により、8世紀初頭から4代遡って確認することができる^⑦。なお、『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』には、和氣郡内に法隆寺の庄2箇所の記載がある。

最後に、当古墳が所在する山越・姫原町の現地名のうち、姫原の地名に由来する伝承を紹介しておく。調査地の北東150mの丘陵緩斜面に一对2基の五輪塔があり、「比翼塚」という名称で祀られている。近親恋愛、政争の末、伊豫流配にあり、心中をとげたという允恭天皇(412~453)の皇子木梨輕太子と、同母妹木梨輕大郎女の墓とされ、この輕大郎女にちなんでの姫原の地名という^⑧。本書で報告されるように、この地域には1墳丘に複数の主体部を持つ古墳の分布がみられ、現況ではその痕跡もみられないが、1墳丘2石室の古墳を記紀の記載になぞらえ、祀りえたものと推測される。調査地北西150mの池のほとりの小祠「輕神社」とともに、地元住民の散策コースとなっている。

注――

- ①平井幸弘 「松山平野、石手川扇状地の地形と沖積層」『日本における沖積平野・沖積層の形成と第四紀末期の自然環境とのかかわりに関する研究』1988
- ②多田 仁 「松山平野の石器文化」『祝谷アリ遺跡』(財)松山市埋蔵文化財センター 1992
- ③宮本一夫 「文京遺跡第8・9・11次調査―文京遺跡における縄文時代遺跡の調査―」愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室 1990
- ④栗田茂敏 「文京遺跡4次調査」『道後城北遺跡群』(財)松山市埋蔵文化財センター 1992
- ⑤西尾幸則 「道後城北RNB遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会 1989
- ⑥阪本安光 「松山市・船ヶ谷遺跡」愛媛県教育委員会 1984

- ⑦栗田茂敏 「大瀬遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会 1989
- ⑧下條信行 「松山平野と道後城北の弥生文化」『松山大学構内遺跡』松山大学・松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター 1991
- ⑨栗田茂敏・山本健一 「山越遺跡 2次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター 1991
- ⑩『松山市史料集 第1巻 考古編』松山市教育委員会 1980
- ⑪栗田茂敏 「吉藤宮ノ谷遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』松山市教育委員会 1989
- ⑫宮崎泰好 「祝谷六丁場遺跡 調査報告1」松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター 1991
- ⑬梅木謙一 「祝谷アリ遺跡」(財)松山市埋蔵文化財センター 1992
- ⑭宮崎泰好 「高月山古墳群調査報告書」松山市教育委員会 1988
- ⑮ 前掲注⑪文献
- ⑯ 「松山市埋蔵文化財包蔵地地図」松山市教育委員会 1987
- ⑰西尾幸則 「鶴が峰遺跡」『愛媛県史 史料編 考古』愛媛県教育委員会 1986
- ⑱池田学・宮崎泰好 「船ヶ谷向山古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅴ』松山市教育委員会 1989
- ⑲栗田茂敏 「北谷王神ノ木古墳・塚本古墳」松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター 1991
- ⑳岡野 保 「北谷古墳(墳丘・石室実測調査報告書)」松山商科大学史跡研究会 1980
- ㉑ 前掲注⑯文献
- ㉒藤田憲司 「讃岐の石棺」『倉敷考古館研究集報 第12号』倉敷考古館 1976
- ㉓松原弘宣 「古代の地方家族」吉川弘文館 1988
- ㉔『伊予路の文化』松山市教育委員会 1965

II 調査の経過

1. 調査に至る経緯

松山市が計画した松山市立清水小学校の分離新設に伴い、平成3年4月、建設主体者である松山市長田中誠一より、同校用地にかかる埋蔵文化財確認願が松山市教育委員会（以下、市教委）文化教育課に提出された。同校用地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地のうち、「45 姫原古墳群」・「168 姫原遺物包含地」といった周知の包蔵地に含まれる丘陵地である。

埋蔵文化財確認願を受けた市教委 文化教育課は、同校用地の試掘調査を（財）松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）に指示、埋文センターはこの指示にもとづき、平成3年12月9日より平成4年2月29日の間トレンチによる試掘調査を行った。

試掘調査の結果、丘陵部、鞍部含めた総面積26,959m²にわたる用地のうち丘陵部の3箇所において数基の古墳の存在が認められたため、埋文センターはこの試掘結果を文化教育課に報告、文化教育課はこの結果報告を愛媛県教育委員会（以下、県教委）に上申、県教委は当該部分の本格調査が必要と判断し、その旨を市教委に通達するとともに本格調査にかかる指導を行った。本格調査対象面積は2,000m²である。

県教委の指導・指示を受けた市教委は、埋文センターに調査を委託することとし、両者協議の結果、平成4年4月1日から平成5年3月31までの1年間を調査期間として本格調査を実施することとなった。埋文センターは予定通り平成4年4月1日より本格調査に入り、同年12月28日をもって屋外調査を終了、引き続き屋内整理作業を行い、翌平成5年3月31日をもって調査を終了した。

2. 調査組織

調査委託 松山市長 田中 誠一

調査主体 財団法人 松山市生涯学習振興財団 理 事 長 田中 誠一

事 務 局 長 渡辺 和彦

事務局次長 鶴井 茂忠

埋蔵文化財センター 所 長 和田 祐三郎

次 長 田所 延行

調査係長 西尾 幸則

調査主任 田城 武志

調査主事 栗田 正芳（文化教育課職員）

調査組織

調査担当

調査員 栗田 茂敏

調査員補 大森 一成

(屋外調査作業員) 伊丹直孝／岡崎一憲／岡本克司／越智和博／木村茂／歳木義夫／栗林
和孝／田中茂樹／友近志郎／平岡孝史／保島秀幸／松岡欣弘／山口吉
・／好川昇三郎／渡邊常信

ほか

(屋内整理作業員) 小坂ゆかり／土居美智子／丹生谷道代／西尾得子／三好麻紀

調査地 松本市山越3丁目480番地 外

調査面積 2,000m²

調査期間 平成4年4月1日～平成5年3月31日

III 調査の成果

1. 試掘調査

(1) 調査地の現況と調査の方法（図2）

調査地は、柑橘類を主体とする果樹園として利用されていた丘陵で、大きくみると、北西方向に突き出した2本の尾根と、これらの尾根に挟まれ、北西方向に開けた鞍部とで成り立っている。この鞍部は、かなり急な勾配を持っており、その中ほどは掘削され、その耕土でもって堤を築き灌水用の溜池として利用されている。したがって、この鞍部に関しては溜池の上方、南東部にあたる斜面のみを調査対象とした。また、鞍部に面する両丘陵の斜面も急峻で、遺構が存在する可能性は薄いと判断されたため、結果的に試掘調査の主な対象としたのは丘陵稜線沿いを中心とした部分となつたが、これらの部分においても耕作や、土砂の流失のため既に岩盤が露出している箇所が少なからずある。

調査にあたっては、便宜上、調査地を図示した6つのゾーンに区画した。西側丘陵の北西に伸びる尾根部をA区、A区丘陵北裾部B区、西側丘陵東面C区、東丘陵南西面D区、同丘陵の北西に伸びる尾根部E区、C・D両区に挟まれた溜池上方の鞍部をF区として、それぞれの地形を考慮しながら、大小計25本のトレンチをゾーンごとに順次掘削して確認を行った。

(2) 調査の結果

遺構の検出をみたのはA区・E区のみで、いずれも古墳である。A区では棱線に沿って掘削したトレンチ、T-1の南東端部付近においてあきらかに埴丘盛土と判断し得る土層と、数点の埴輪片が検出された。また、E区では、A区同様稜線沿いに掘削したトレンチT-17の2箇所において、石室落ち込み石、もしくは石室の一部と考えられる集石や、これに伴って若干の須恵器片の検出をみたため、なおこれに直交するT-21・22を設定し、主体部であることの再確認を行った。この再確認の過程で、T-22において既に検出済みの主体部の他に、丘陵尾根から西側斜面への傾斜変換点付近で、箱式石棺のコーナー部とみられる石組が検出された。その他のゾーンでは、散発的な遺物の採集がみられたにとどまり、遺構の検出はみられなかった。

この結果、本格調査を要する地点は1号墳としたA区の古墳1基、E区にあっては箱式石棺を含めて2号墳としたT-22周辺、3号墳T-21周辺部の2地点となつたが、箱式石棺の検出が予想外の斜面であることを勘案、遺漏なきを期すため地点ごとの部分的な調査にとどまることなく、この2地点を含む稜線上を丸剥ぎすることとなった。

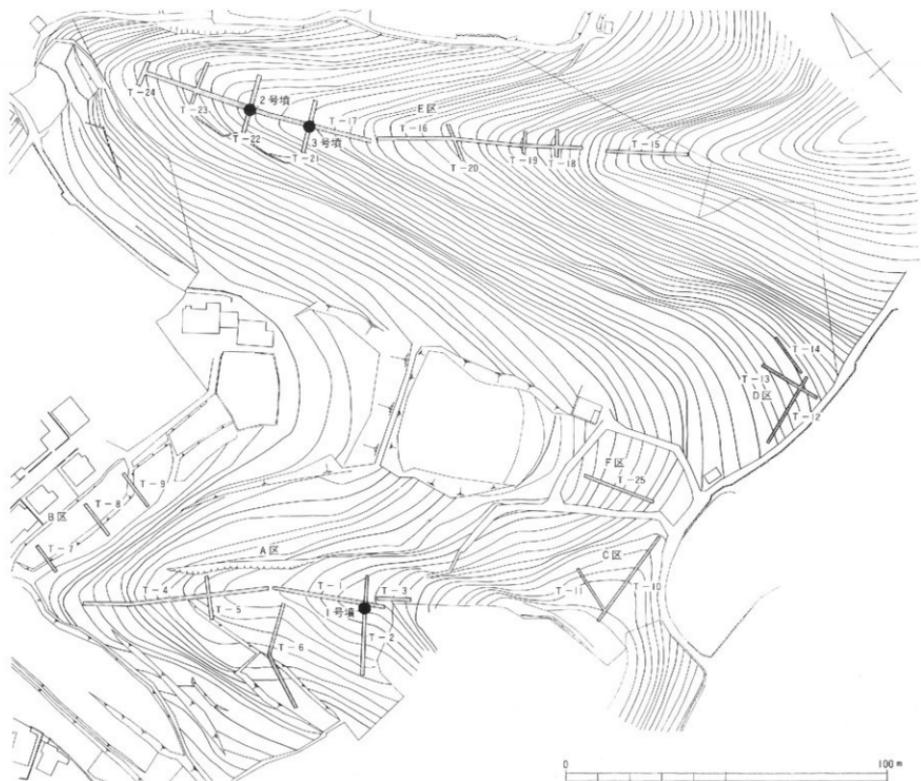


図-2 調査地の全測とトレーニングの位置

2. 1号墳の調査

(1) 墳丘(図3~5)

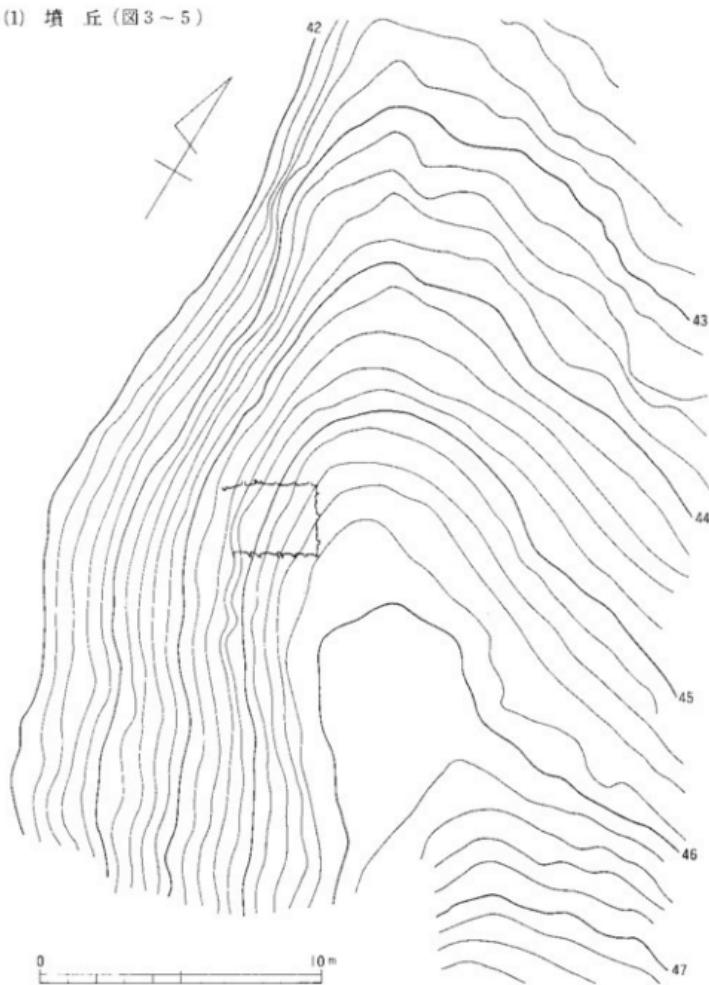


図-3 調査前の1号墳丘

1号墳は、A区とした調査地南西丘陵上、標高46mの位置に造営されている。この丘陵は、北西方向に突出した稜線を有しており、今回の調査区からははざれるが、その最高所で標高59.1mを測る。この地点から比較的急な勾配を持って北西方向に下り、緩傾斜となる傾斜の変換点付近の緩傾斜側に位置する。

本墳の主体部である横穴式石室は、尾根筋に直交するかたちで構築されており、しかも尾根線上に比較的良好な平坦面があるにもかかわらず、この尾根を南西に若干下った勾配の強い斜面に築かれている。この丘陵の地山は、通称マサ土といわれる花崗岩の風化土であるが、ところによってはアブライト質の岩盤が貫入している部分があり、ちょうどこの丘陵の尾根筋平坦面がこの岩盤部分にあたり、主体部はこの岩盤を避けるように花崗岩風化土部分を掘

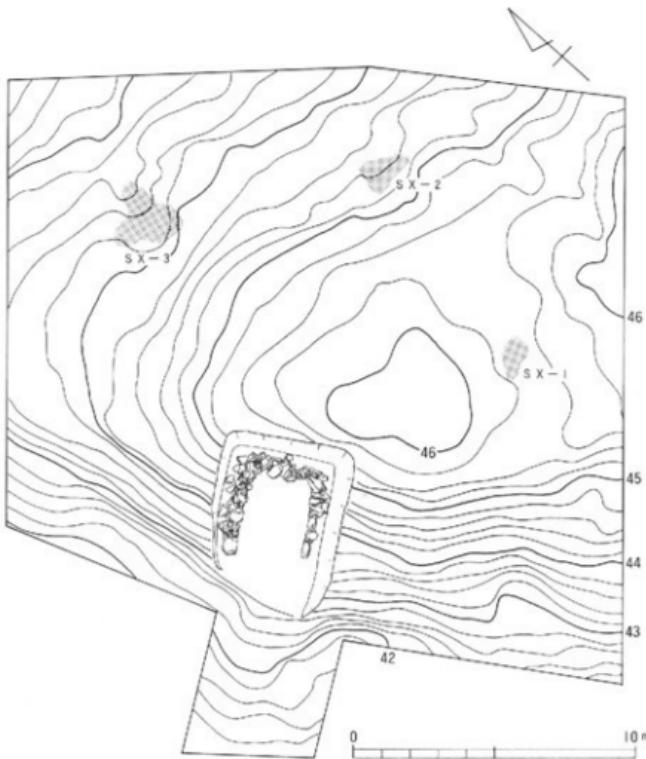
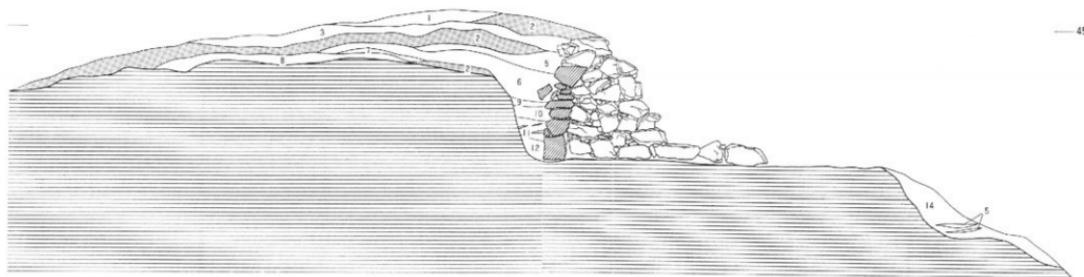
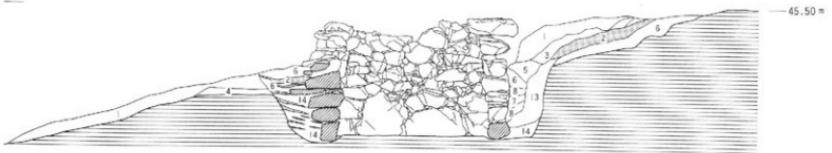


図-4 1号墳丘実測図



- | | | | |
|----------|----------|----------------|------------------|
| 1 黄褐色砂泥 | 5 乳白色粘土 | 9 含黄色粘土纯绿灰色粘土 | 13 黑色粘土·茶褐色砂质土互层 |
| 2 黑色粘土 | 6 黄灰褐色砂泥 | 10 含黄色粘土纯绿褐色粘土 | 14 岩褐色砂泥 |
| 3 绿灰褐色砂泥 | 7 灰褐色砂泥 | 11 淡色砂质土 | |
| 4 棕色砂质土 | 8 明灰褐色砂泥 | 12 含黑色粘土淡黄色粘土 | |



图-5 1号填丘断面图

削して構築されている。つまり、主軸が尾根筋に直交するとはいえ、尾根を切るのではなく「T」字状に尾根線につきあたるような位置関係になる。岩盤部分での掘削等の地業の困難さゆえの結果であろうと考えられる。このような地山の状況から、例えば稜線切断とか、墳形の削りだしというような明確な地山整形の痕跡はみられない。

墳丘盛土は、主体部背後の平坦部分での残存が最も良好で、地山面から1m近く残っている部分もある。黒色土、乳白色粘土、または両者が「ブロック状に混ざりあった土、これらが互層となって積み上げられている。遺存の良好な主体部背後の状況、および埴輪の出土状況から直径15m程度の円墳であったものと考えられる。

(2) 横穴式石室(図6~8)

1号墳の主体部となる横穴式石室は、前項でも触れたように尾根筋を南西へ若干下った斜面部に構築されている。墳丘自体は尾根を中心とした部分に築かれている。この結果、石室は墳丘の中心からかなり南西へ偏した部分に位置することになり、石室奥壁部をもってしても直径15mの墳丘の中心部からはまだ2m程度は離れている。

墓壙は隅丸長方形状に斜面を掘り込み、その深さは斜面上方奥壁部で1.2mを測る。斜面の勾配が強く、この比較的深い掘り方によって玄室基底部の平坦面がかろうじて確保されている。これより入り口寄りの部分には盛土の残存がみられ、基底面をある程度造成していたものと考えられる。また、墓壙はある程度封土を積んだ段階で掘削されている。

主軸をN54°06'30"Eにとり、南西に開口する石室は、その上部を奥壁側から玄門部にかけて斜めにそぎとるように削平され、半壊状態で遺存していた。玄室長4.4m、幅は奥壁部で2.4m、玄室中央部2.5m、玄門部1.7mと玄門部に至って強く縮約するプランをなすが、玄門部に明確な袖のような張り出しが持たない。閉塞施設や、羨道については不明であるが、造営された斜面の状況からみて羨道といえるような施設を持っていたものとは考え難い。高さは最も遺存の良好な奥壁で1.8mを測る。最大50~60cm程度の比較的小ぶりの割り石を小口積み、或いは横積みする。掛け積みは少なく、裏込めの粘土を固くつき固めて強度を保っている。石材は、花崗岩風化土とともに丘陵を構成するアブライト質の岩盤と同様の石材を用いるが、この石材自身の強度はさほど強いものではない。両側壁の持ち送りは、基底面から1.8m前後の高さの部分で15cm程度と極めて小さく、このままの状態ではもし仮にこの上さらに1mを越える高さを想定しても、持ち送りは僅かなものであり、天井石材の確保を含めて天井石の架構は困難を極めたものと思われる。壁石材の大きさ、石材強度を考慮に入れればなおさらのことである。なお、石室内への天井石の落ち込みはみられていない。

玄室は、小型の割り石でもって入り口と区画されていたことが抜き戻によって確認されている。床面には拳大、或いはそれ以下の円礫が敷きつめられ、さらにこの面を非常に精製された茶褐色粘土が約20cmの厚さで覆っており、いちおう礫床が一次埋葬面、粘土床が二次埋

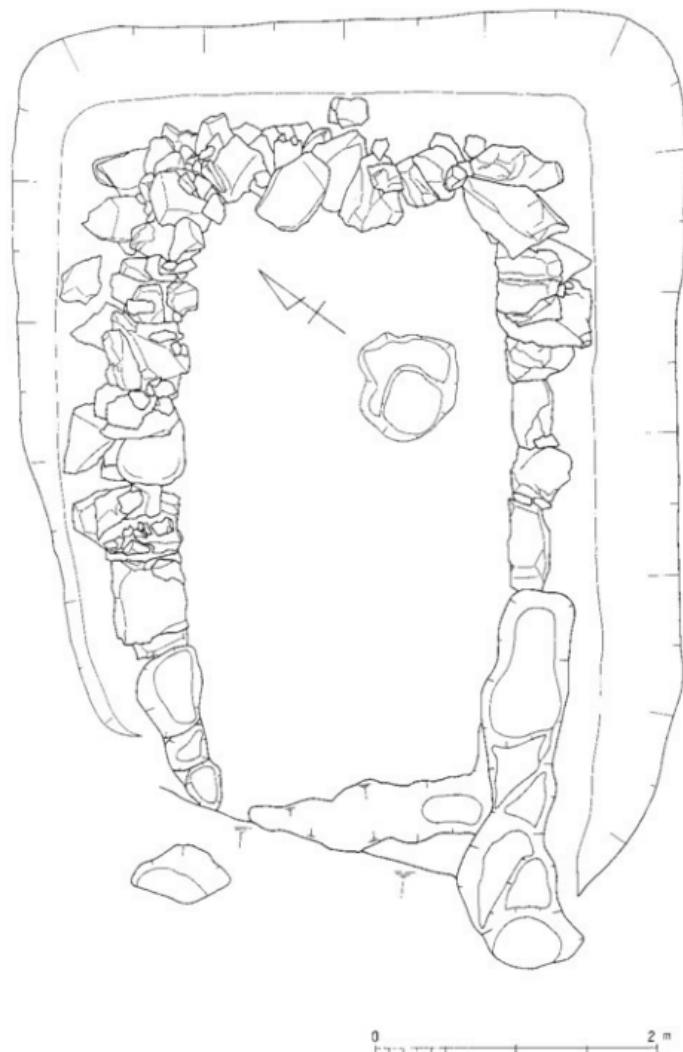


図-6 1号墳石室平面図

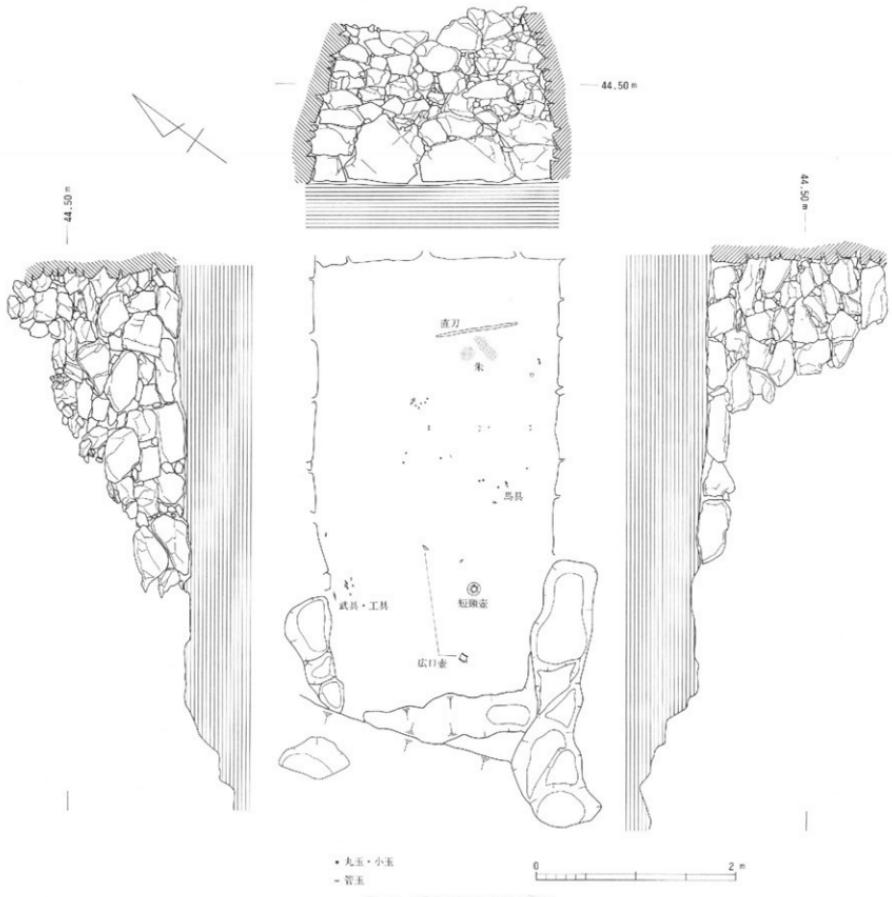


图-7 1号石室层间·遗物配置图

1号墳の調査

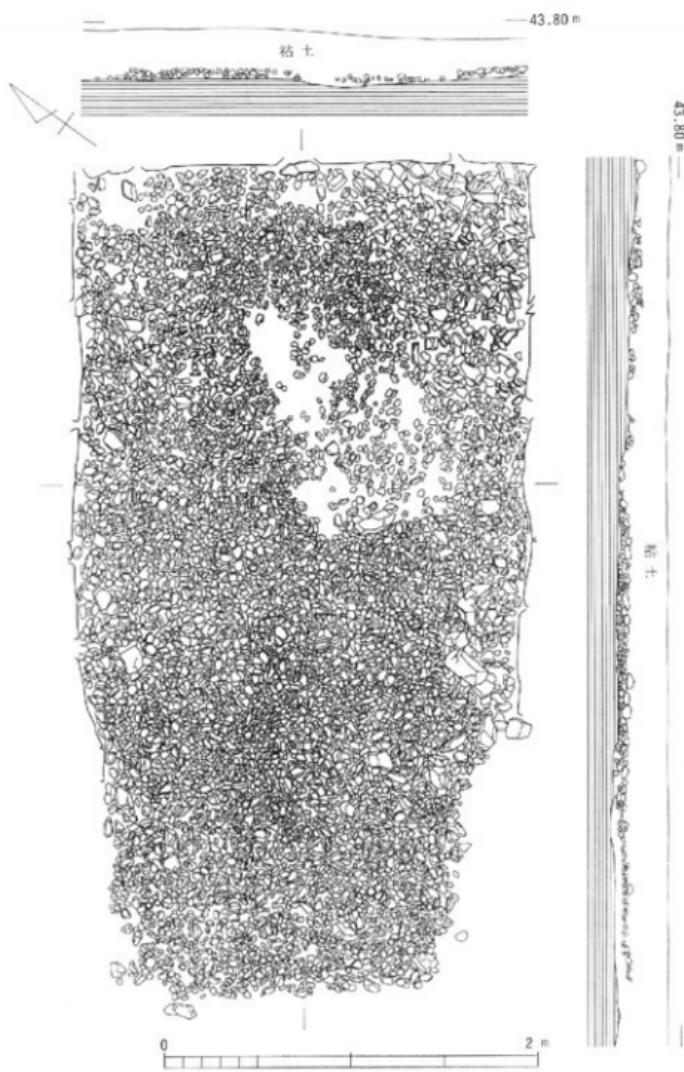


図-8 1号墳石室床

幕面であったものと考えられるが、後述されるように粘土床面での遺物の出土は皆無に等しく、実際この面での埋葬が行われたかどうかは不詳である。また、床面の礎下面の墓擴基底面において直径40cm、深さ30cm程度の円形豈穴が検出されている。この豈穴には、石室裏込め土と同様の乳白色粘土をブロック状に含んだ赤褐色粘土が充填されており、その上部には床面礎が沈み込んだような状態で入っている。このことから、本主体部に伴うものであることは間違いないが、特筆すべき遺物の出土はなく、石室構築に伴うなんらかの補助的な施設のための穴と判断している。

(3) 石室内の遺物出土状況（図7）

粘土床面からの遺物の出土は須恵器広口壺の口縁部片1個体2点のみであり、具体的に埋葬の状況を知ることはできない。また、玄門部付近から、この粘土に埋め込まれた状況で1点の須恵器短頸壺が正立した状態で出土しており、粘土床を貼る段階で、なんらかの意味を持たせて埋め込まれたものと考えられる。

礎床面の遺物も、粘土床を貼る段階で主に土器類の石室外への持ち出しが行われているよう、土器としては団化不能な須恵器の細片3点が検出されたにすぎない。その他、鉄製武具・工具・馬具類の断片、若干の玉類が出土している。遺物の出土分布は、図に示されたとおりである。奥壁より80~90cm、長軸線よりやや北東側壁に寄ったあたりに朱の分布がみられ、この部分が被葬者の頭部と考えられる。玉類の散布する部分を腕の周辺と考えると、被葬者はほぼ玄室長軸に平行に安置されたものと思われ、頭部の直近に直刀が配され、その他の鉄製品は両側壁寄りに振り分けて配置された様子が窺える。これらの鉄製品のうち馬具は北東壁側に、鎌や刀子等の武具・工具類は南西壁側に集中しており、原位置を大きく損なってはいないものと考えられる。

(4) 石室内出土の遺物

礎床を覆う粘土が非常に精製され、粘質の強いものであったため、礎床面検出の際にこの粘土に付着してとり上げられてしまったものも少なからずある。このような事態は調査中に当然予測されたことであり、2mにあまるこれらの粘土はすべて水洗され、その結果7点の鉄製品と22点の玉類、2点の銀環が新たに検出された。以下、これらの遺物を含めて記述する。

須恵器（図9）

短頸壺（1） 若干の焼け歪みはあるが、おむね器高9.7cm、口径7.4cm、胴部最大径13.5cmを測る完形品である。張りの強い胴部と、僅かに内傾しながら短く立ち上がる口縁部を持つ。回転ヘラ削りは、底部から胴張り部の間の底部寄り1/2程度の部分に施されている。種々は時計方向に回っている。また、胴張り部を1.5cm程下った外面には上下の部位の接合痕が観察

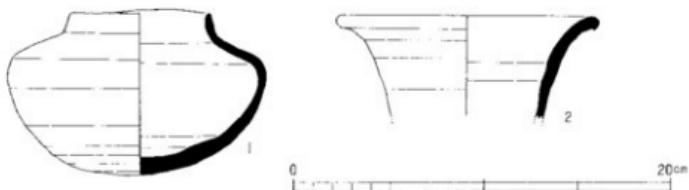


図-9 1号墳石室内出土須恵器

できるが、内面では撫で消されている。焼成は堅緻で、色調は暗灰色を呈するが、蓋を被せた状態で焼かれたものと考えられ、口縁部の周縁に直径9.6cmの蓋痕跡が色調の違いとして明瞭に観察できる。なお、胴下半部の対向する2箇所に2個一対で指先大の色調の異なるヘラ削り後の溝みがみられ、焼成時に支えとなった焼き台のような窯道具の痕と思われる。

広口壺（2） 口径14cmを測る壺口頸部片2点が出土しており、接合はしないが同一個体と考えられる。ラッパ状に外反しながら開いた口縁部は端部を丸く收める。焼成は良好で、自然釉が多くかかっており、外面は全面漆黒色、内面には部分的に緑色の釉の付着がみられる。

鉄製武具・農工具（図10）

矛（3） 3個の破片が接合しており、そのうち矛身部のみが調査時に玄室南西側壁部で、茎部は水洗によって検出された。身部の先端部側を欠損、現況長17.5cm、うち茎部長8.7cmを測る。幅2~2.5cmの身部は明確な鏃を持たず、最大厚0.5cm程度の偏平な蒲鉾状断面を呈している。茎部は梢円形断面に鉄板を折り曲げた袋状になっており、茎端部で長径2.5cm、短径2cmを測る。

鎌（4~12） 水洗検出のものを含めて9本が出土、うち出土位置が確認できるものはすべて玄室南西側壁寄りに集中している。いずれも長頭鎌で、鎌身部の遺存する4点のうち、5を除く3点は柳葉鎌である。5は腸抉を持つ片刃鎌であるが、この種の鎌としては刃部が短く、その先端部を欠失している可能性がある。8~12は茎部片であり、このうち最も残りのよい8は尖根式で、基部付近の木質の付着がみられる。

鎌先（13） U字状鎌先の断片、幅3.7cmを測る。水洗時の検出、出土位置は不明。

刀子（14） 同一個体と思われる茎部、刃部先端部の2点の破片である。玄室南西側壁寄りで検出された。茎部には把の木質が残存している。

直刀（15） 玄室奥壁寄りで奥壁に平行して配置された状況で出土した。銹化が著しく、団で鞘のように表現されている部分は銹化により彫れあがった部分であり、とり上げ後の刃身部の削り出し等の処置は事実上不能な状態にある。出土時の現況で70cmの長さが計測された。

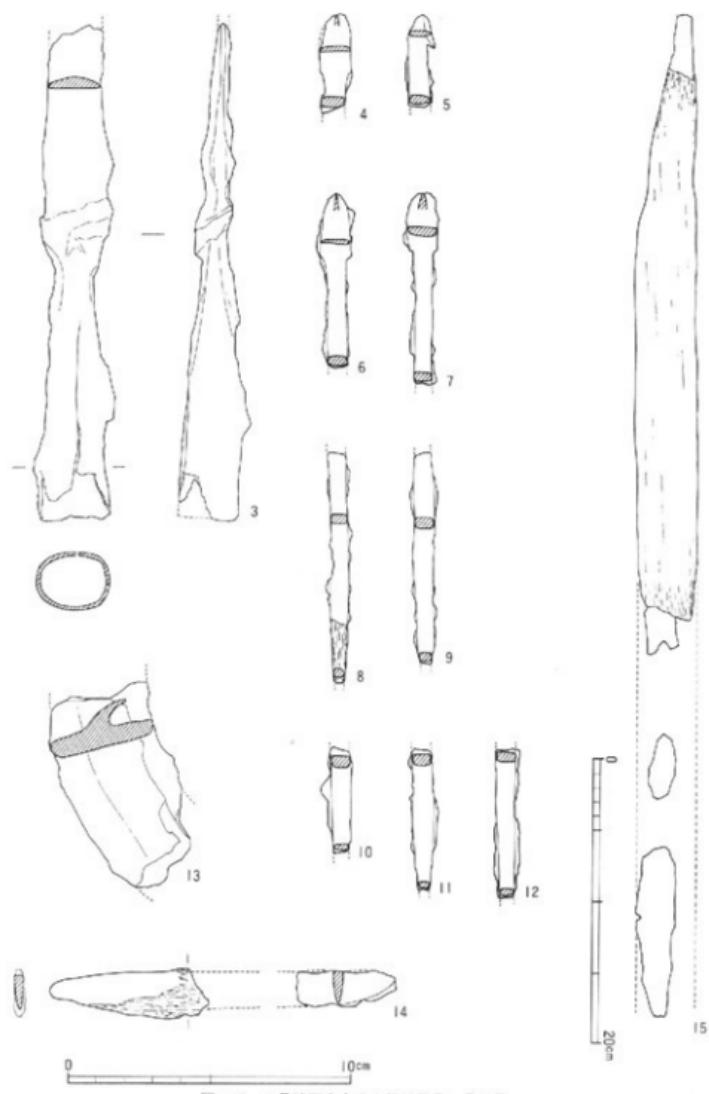


図-10 1号墳石室内出土鉄製武具・農工具

馬具(図11)

轡(16~20) 16は鏡板と街である。鏡板は厚さ4mmの鉄板で、街は鏡板を貫通するのではなく、鏡板側に設けられた「θ」状の穴の中央橋状部に街先の環が連結された格好になっている。17は引手と引手壺と考えられる部分で、引手は2本の鉄棒を捻って制作されている。18も17の引手部分と同様の制作方法がとられており、同様の部分と考えられる。19は鏡板の一部と考えられる破片、やはり2本の鉄棒により制作された環が付随しているが、他の部位

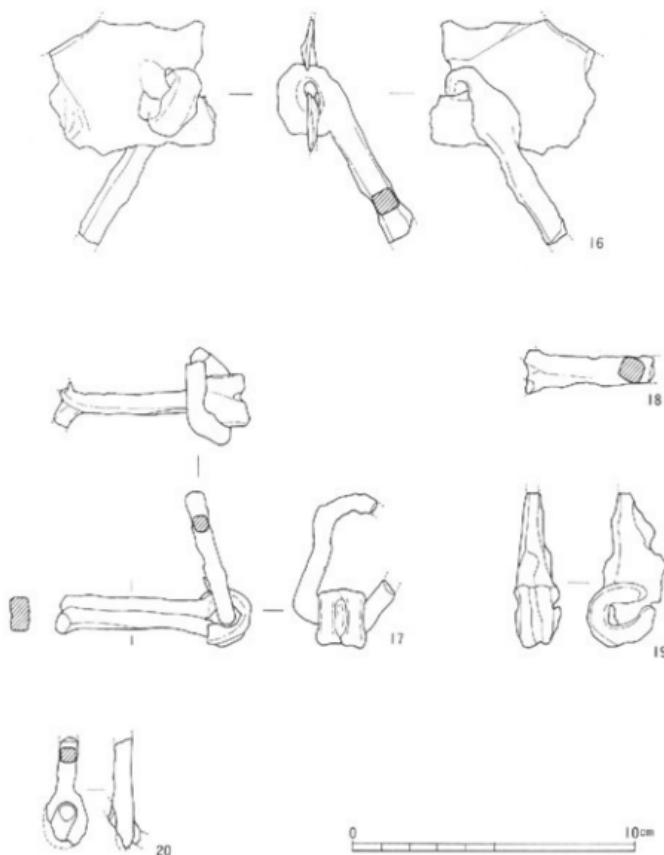


図-11 1号墳石室内出土馬具

の一部が接着した結果のようにはみえない。20は環状金具の連結部片であるが、具体的な部位は不明である。

玉（図12-21~61）

計41点の出土がみられた。うち、正確な出土位置が確認できるものは20点、玄室中央部付近の北東側壁寄りでかなり散乱した状態で出土している。21~54はガラス製、57~61が石製である。ガラス製の玉のうち、38~55のように直径5mmを越える丸玉はすべて濃紺色で穿孔された両面に一見擦り磨いたような平坦面を持つが、実体顕微鏡による観察によつても擦痕のようなものは認められない。55の玉の片面の小口直下には、まだガラスが柔らかい段階でつけられた工具の痕跡が、1条の鋭い窓となって残っている。この窓は螺旋状に巡っており、起点と終点とが食い違つておらず、この窓が芯棒を軸に玉を回転させながらつけられたものであることがわかる。これらのことから、この種の玉の製作は、鋳型によるものではなく、金属線にガラス塊を巻きとる巻き玉のような手法で行われているものと考えられ、平坦面は成形の最終段階での、押さえか切り落としによるものと思われる。

その他の小玉は、直径3~4mmを前後するものが多い。最小の21で直径2mmを測る。21が明るい緑、22~27は黄緑、28~30は黄色でいずれも不透明、31~35は半透明な薄青色で、36が不透明な紺緑色、37は不透明な赤色を呈している。

ガラス製のものの中に1点、玉として扱つてよいものかどうか判断しかねるが、56のような特異な形態をなすものがある。紡錘形の両端をカットしたような形態の幾分偏平なもので、全長7mm、最大幅3.5mm、最大厚2.7mmを測る。中空部も平面形と同じく中影れ、肉厚はこの

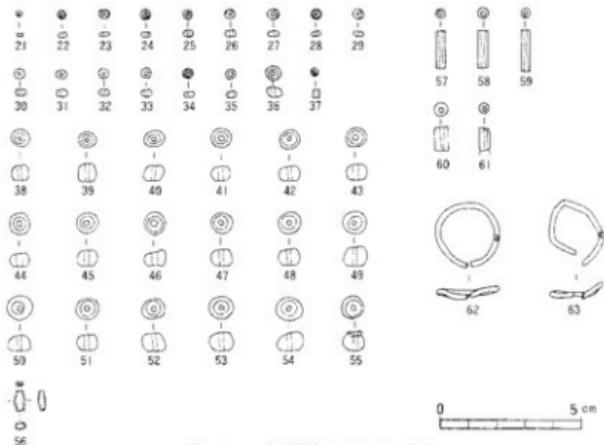


図-12 I号墳石室内出土玉・環類

彫れの部分が最も薄く、両端部が厚い。横断面形は梢円形から隅丸長方形に近い形状をなしている。顕微鏡観察によれば、小さな気泡は概ね丸く、中彫れの部分に2箇所確認できる大きな気泡は長軸方向に平行に紡錘形に長く伸びている。色調は非常に透明度の高い薄青色で、肉眼では確認できないが、表面には急冷によって生じたと考えられる不定方向の細かいひび割れがある。小口には研磨などの二次的な加工は施されていない。ガラス小玉製作過程のいわば二次的な素材としての管状ガラス片かもしれない。

石製の玉はすべて管玉で、碧玉を素材としている。破損品61だけは風化が進行して白っぽい緑色の色調を呈している。

銀環（図12-62・63）

2点ともに水洗により検出されたもので、玄室床面を大きく4区画した場合、開口部よりみて右奥部で採取した被覆粘土中よりの出土である。63は大きく原形を損なっており、鋳化も進行しているが、本来62と同形同大をなしセット関係にあったものと考えられる。62は直径2.4mmの銀線を外径2.2cmの環状に曲げて製作されている。

（5）墳丘裾部出土の埴輪と須恵器

出土状況（図13～15）

墳丘封土上からの埴輪の出土はなかったが、主体部背後の墳丘裾部において円筒埴輪・盾形埴輪、これらの埴輪とともに1点の須恵壺、岡化不能な須恵器胴部小片数点が出土している。これらの遺物は、S X-1～3とした主体部東部から北東部にかけての墳裾3箇所の不整形な窪みに溜まったような状況で検出されており、当初は集積土壤のような性格を想定して



図-13 S X-1 墓輪出土状況

図-14 S X-2 墓輪出土状況

いたが、それぞれの窓みのプランが不整形であること、床面から遊離した状態での検出であること、さらに流入封土とみられる土層が観察されること等の要因から埴丘上から封土とともに流入埋積したものと判断した。出土位置は図4に示したとおりである。また、それぞれの地点出土破片相互の接合例がかなりみられることから一括して扱っている。

埴輪（図16～18）

円筒埴輪（64～77） 出土した円筒埴輪の量は平箱にして5杯あまりあるが接合不能な小破片がその多数を占める。ある程度復元できたものと摩滅の比較的少ないものを図示している。64～71が土師質のもの、72～74が須恵質のもの、75～77は前二者の中間的な様相を示すもので灰色になるまで十分に還元されてはいないが須恵質のもののように硬質に焼成されているものである。摩滅の少ないものを抽出したため、須恵質あるいはそれに準じるものが多い印象を受けるが、実際には総量に占める須恵質埴輪の割合はその1割にも満たない。また、有黒斑のものはない。

土師質のものなかに口縁部、底部の径を計測できるところまで復元できたもの、64・65、70・71がある。これらをみてみると口縁部径23～25cm、底部径16cmを前後する値を示している。また、土師質のものの透かしは円形で、その穿孔位置は65・71にみられるように、口縁部からタガを1段介した2区画目、底部からタガを1段介した2区画目に施される。このことから、底部から最も良く立ち上がった69をみてみると、上端部に確認される円孔は口縁部から2区画目のものと推察される。この個体自身、全周の1/3程度の遺存であるから、底部



図-15 S X - 3 塩輪出土状況

1号墳の調査

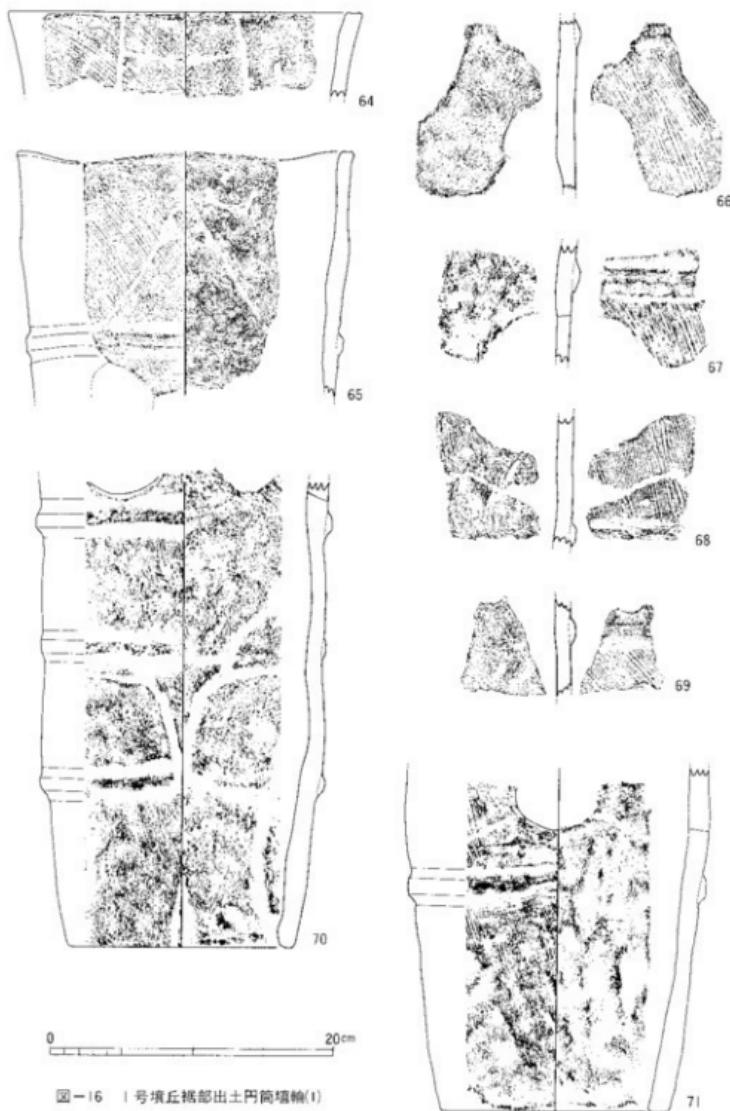


図-16 1号墳丘底部出土円筒埴輪(1)

より2区画目の円孔は遺存しない部分に施されていたものであろう。これらのことと総合すると、高さは53cm前後、4本のタガによって5段に区画された偶数段の対向する2箇所に段ごとに90度の穿孔位置のずれをもって透かしが施されていたものと考えられる。ただし、須恵質の74のように胴部径28cmとこれらのものの法量を凌ぐものも存在しているから、すべての円筒埴輪についてこのことがあてはまるわけではない。なお、土師質のものの透かしが円形であるのに対して、須恵質のものの中には73・74にみられるように隅丸方形に近い透かしを持つものがある。

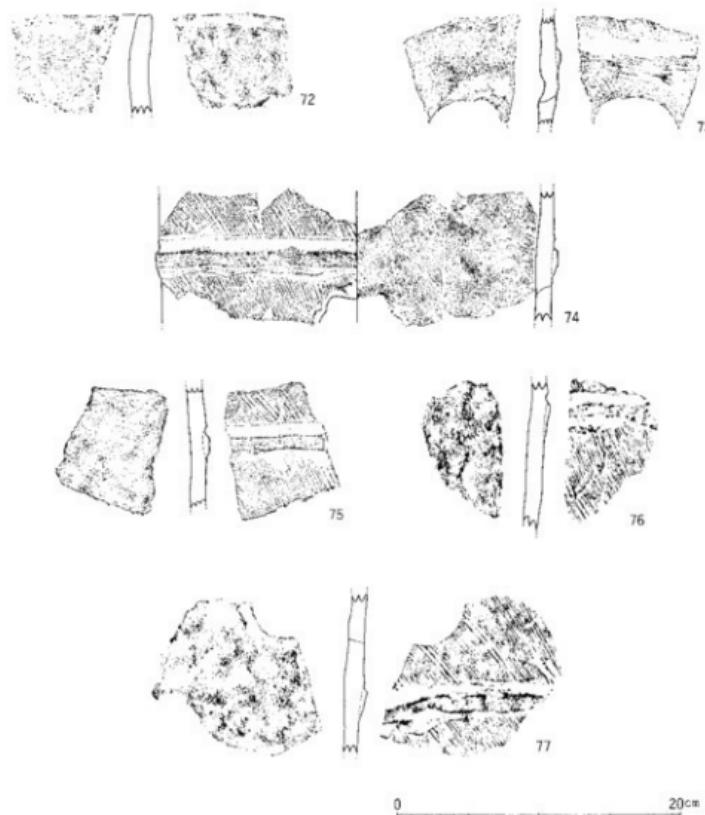


図-17 1号墳丘根部出土円筒埴輪(2)

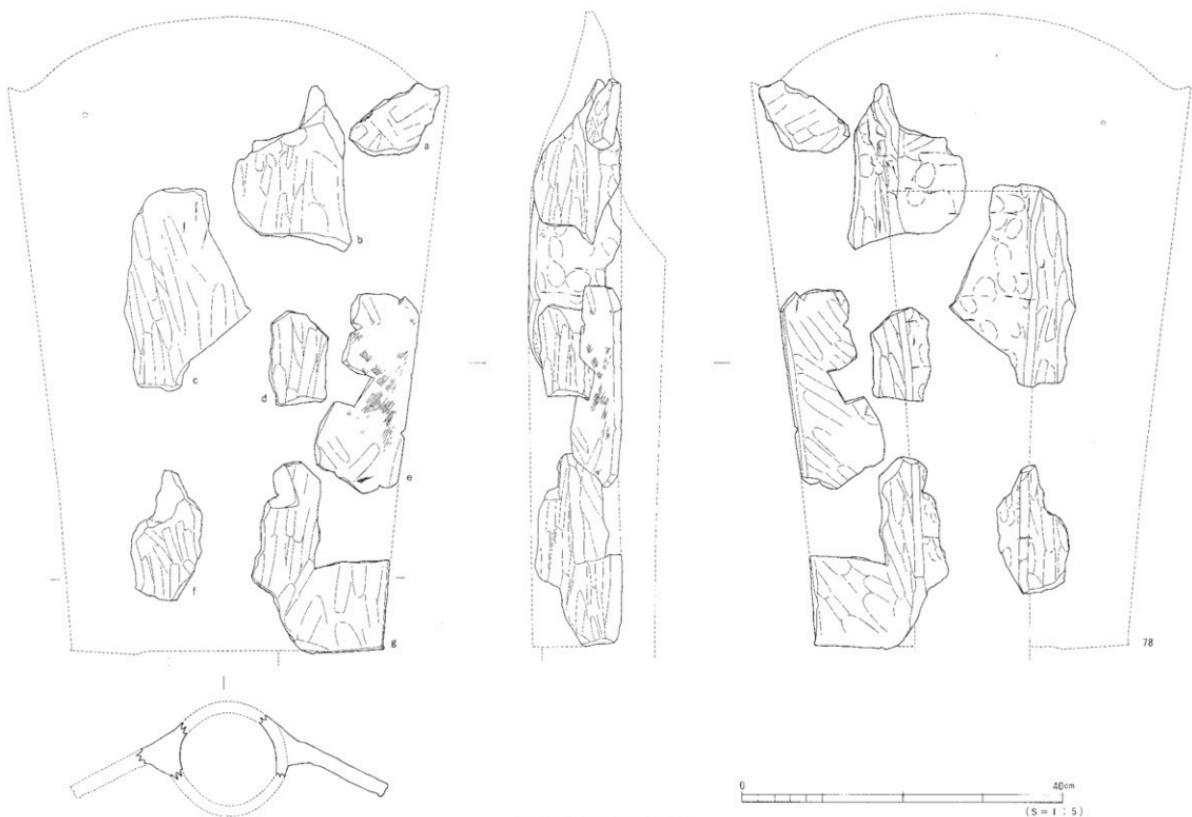


图-18 1号填丘底部出土质形埴輪

土師質の埴輪の外面調整は右下がりの斜め刷毛目で二次調整は行われない。64・65で観察すると、口縁部に横撫では行われるが、きわめて狭い範囲で、しかも撫でそのものが軽く行われるため、口端部の直近まで刷毛目が残っている。最下段タガ以下の底部付近には刷毛目はみられず、右下がりの斜め方向に板状工具による圧痕があることが71の底部に観察される。69の底部については摩滅のためあきらかではない。内面は指撫で調整されている。須恵質、またこれに準ずるものについても土師質のものと基本的には変わらないが、ただ口縁部片72では内面に刷毛目が用いられ、外面が指撫でとなっている。

タガは土師質、須恵質を問わず断面台形状、もしくは蒲鉾形のきわめて低いものである。調整にはどの個体も共通した癖があり、タガ上部は比較的入念な横撫でがみられるが、下部は板状工具のようなもので粗く撫で付けというよりはおさえつけられ、その後横撫では施されるもののきわめて軽く、タガと胴部との境に段があるような個体も多い。この特徴から、タガを持つ破片であれば小片であっても上下の判別は容易である。

盾形埴輪（78） S X 2・3から出土しており、両地点出土破片相互の接合もみられる。盾部前面は全くの無文であるため、文様構成での破片の割り付けは不能であるが、粘土帶の接合痕、盾部前面の湾曲度、背面円筒部の径等からある程度の復元位置を推定することは可能である。まず、破片 b の背面下位の部分において円筒部が終了しており、以上は指頭で捏ねた部分が柱状に上方に延びていること、円筒部の曲率が正円に近い下位の部分に比べて偏平にねじれたように潰れていることから、b が前面からみて右方の上端部に近い破片であることがわかる。また、この破片の円筒部粘土帶の積み上げは、上方粘土帶が下方のそれにかぶさるように接合されているから、その他の破片個々の上下はこの接合痕を観察することで判別できる。破片個々の上下の確定により、自ずと円筒部中軸線で割った場合の左右が決まる。

破片 g は錐状突出部の端部 2 面が生きているので盾部最下位の前面よりみて右コーナー部にあたる破片である。この g の錐状突出部の背面側端部には、前面には施されない面取りがあり、破片 e の表裏はこの側端部の面取りの有無によってわかるが、左右は不確定であり、ここでは仮に右側に置いている。同じく突出部の破片である a には湾曲する端面が生きており、上端コーナーに近い部分を想定した。なお、この破片 a には背面へ斜めに貫通する径 6 mm の孔が焼成前に穿たれている。

前面からみて左側に位置する破片 c は、円筒部の曲率の上・下位での差異、つまり上位部分で偏平になりつつあるところから破片 b にごく近い部位とみてよい。残りの d・f は、円筒部の直径、粘土帶の接合痕から図示した位置を想定した。

これらの検討の結果、想定される復元形は、推定高 78cm、上・下端部幅がそれぞれ 55cm、39cm、円筒部径 14.4~19.4cm 程度で形態は図に破線で示したようなものになった。

先述のように盾部前面は何の文様も持たず、板状工具による継ないし斜め方向の撫でによって調整されるのみである。円筒部内面は粗い指撫で・おさえで、部分的に輪積み痕跡が残っている。突出部と円筒との接合部は特に背面側を強く撫でられている。また、破片eには斜め方向の刷毛目がかすかに窺える。

須恵器（図19）

环（79） S X - 3 で埴輪群とともに出土した环身片、器高4.1cm、口径12.4cmを測る。内傾して立ち上がる口縁部は、端部を尖り気味に丸く取める。底部から体部の2/3程度の範囲を回転ヘラ削りされている。埴輪の回転方向は時計回りである。



図-19 1号墳丘根部出土須恵器

（6）弥生時代の造構と遺物

土壙SK-1（図20）

墳丘封土下層の地山面において、土壙SK-1が1基検出された。1.8×1.4mの楕円形で、深さは現況で30~10cmを測る。断面逆台形状で、壙底はフラットである。弥生時代後期初頭の甕、壺とともに石庖丁の半裁品1点を出土している。

S K - 1 出土遺物

弥生土器（図21）

甕（80~83） 上半部片・底部片それぞれ2個体ずつ出土している。口径16.5cm、胴部最大径20cmを測る中型甕80は肥厚を持たない口端面に2条の浅く不明瞭な凹線を施される。胴部の内外面はヘラ磨き、口頭部は横撫でされている。器高の低い小型甕81は口径14.5cm、胴部最大径15cmを測る。この個体も口端面に不明瞭な凹線状が1条巡っているが、口端部上端と外端面をつまむように横撫でした結果のものである。胴部外面の調整は不詳、内面には縱方向の刷毛目がみられる。82・83はくびれの上げ底の底部、大型甕82では底部の製作が3つの工程で行われていることが観察できる。粘土板充填によって製作されるが、高台状の部分は当初から作られているのではなく、底部を内面からある程度塞いだ後作られ、最後に外面から充填して上げ底の底部製作が完了している。

壺（84） 胴部の器壁の薄さに比べて比較的分厚い平底の底部、径8cmを測る。胴部外面はヘラ磨き、内面は板状工具により入念に撫でられている。

石器（図22）

石庖丁（85） 緑色片岩製、片面で剥離しているが、長方形態をなすと思われる石庖丁である。中央よりも背部よりに2孔を穿たれ、この孔の部分で折損している。

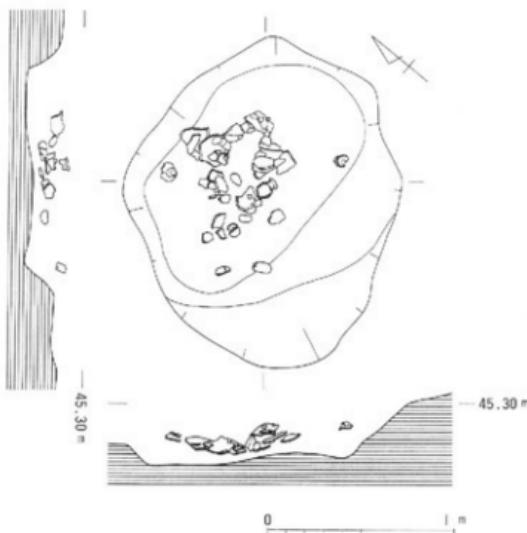


図-20 SK-I 造物出土状況

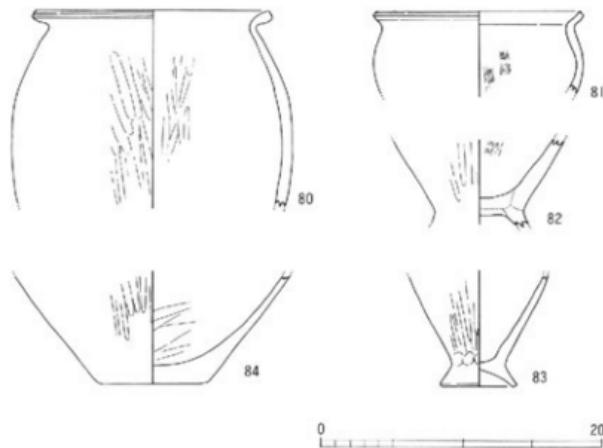


図-21 SK-I 出土弥生器

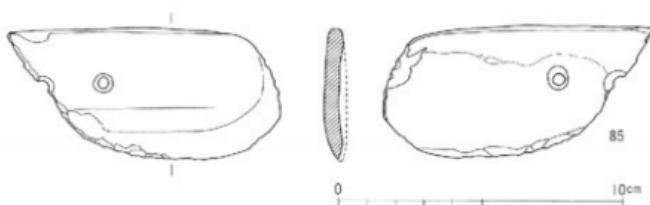


図-22 SK-1出土石瓶

3. 2号墳の調査

(1) 墳丘(図23・36)

2号墳はE区とした調査地北東丘陵上、標高55mの地点に所在し、その位置は最高所で92.8mを測る丘陵稜線を下った先端部に近い緩傾斜面にあたる。試掘調査で検出された主体部の集石は、ほとんどその床面に近い部分であり、かなりな規模の削平が行われている。したがって、墳丘封土はもちろん失われ、地山面も大きくカットされ、地山整形の痕跡もみられない。ただ、主体部背後には弥生時代の包含層が残されたままで、主体部墓壙はこの弥生包含層を切って掘り込まれていることがわかつており、本来ほど大規模な地山整形は行われなかつたものと考えられる。このような現況から、墳形・規模ともにその詳細は不明とせざるを得ない。

主体部は、計3基検出されている。尾根線に直交した配置で、同時期の築造とみられる大型横穴式石室と小豎穴石室の2基が、僅か2m足らずの間隔をおいて並んで検出されており、前者をA主体部、後者をB主体部として調査を行った。また、残る1基はA主体部主軸線に直交して開口部方向2.5mの位置で検出された箱式石棺であるが、その位置関係に同時期構築としては不合理な部分がある。

(2) A主体部

横穴式石室(図24~26)

主軸をN64°59'10"Eにとり、西方向に開口する横穴式石室で、玄室部のみの遺存である。玄室長3.2m、幅1.8m、1号墳と同様玄室入り口部近くになって、その幅を縮約している様相が側壁の状況によって窺える。遺存状況は悪く、最も良好な部分でも腰石から2段目、高さ50cm程度しか残っておらず、腰石を失っている部分もある。

隅丸方形形状を呈する墓壙は、先述のように主体部背後では弥生時代の包含層より掘り込まれている。この墓壙内に大きくてせいぜい50cm程度の割り石を、小口積み、横積みして壁体を構築する。玄室内への進入は段を降りる構造になっており、その部分だけ墓壙もテラス状に張り出した掘り方となっている。

床面には、拳大程度の河原石と最大30cmまでの割り石とが乱雜に敷かれており、玄室入り口付近では側壁とともに既に破壊されている部分もある。河原石は南側壁寄り幅80cm、奥壁から約1.8mの長さに区画されて敷かれたようにもみうけられ、この部分が棺床、或いは被葬者の安置位置であったものと推定される。

石室内の遺物出土状況(図26)

玄室床面から須恵器、鉄製品、玉が出土している。須恵器は奥壁部分に配置され、南隅部

調査の成果

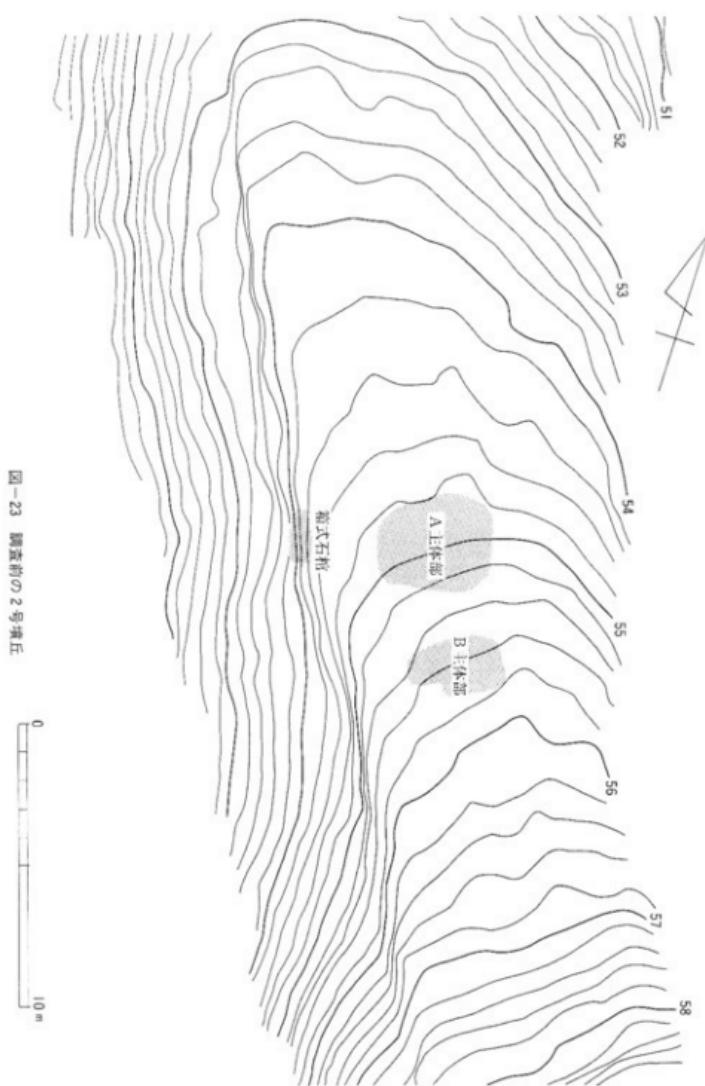


図-23 調査前の2号墳丘

で広口壺と、坏身・蓋のセットが、また北隅付近で高环脚、短頸壺が検出されたが、石室の破壊のわりには非常に安定した出土状況である。玉は僅かに滑石製白玉1点のみの出土で、奥壁より35cm、南側壁より55cmの推定棺床面上で検出された。鉄製品は北側壁に沿った2箇所に配置され、奥壁寄りで鎌が、入り口寄りで刀子と鎌が出土した。

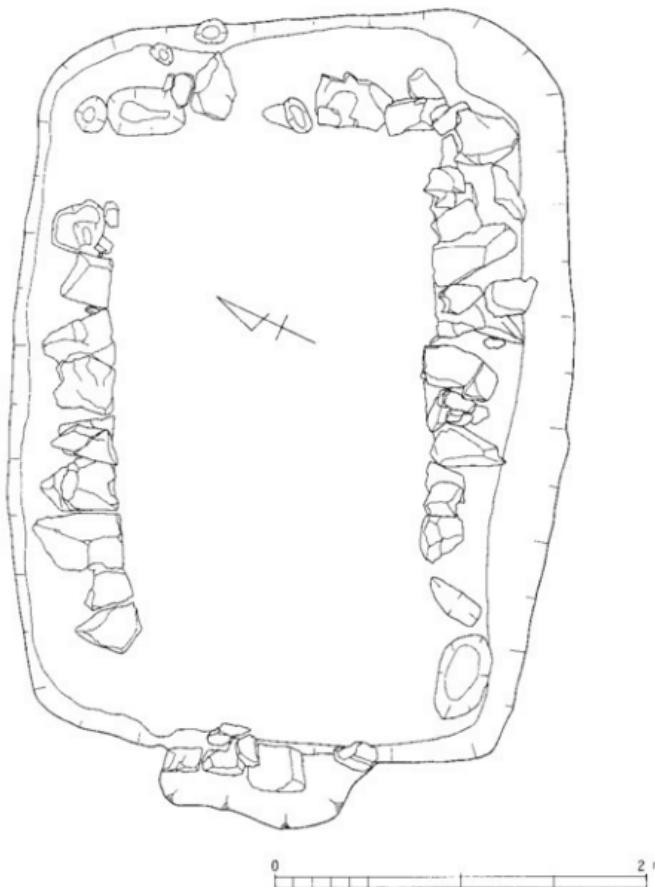


図-24 A 主体部横穴式石室

調査の成果



図-25 A 主体部構床

2号墳の調査

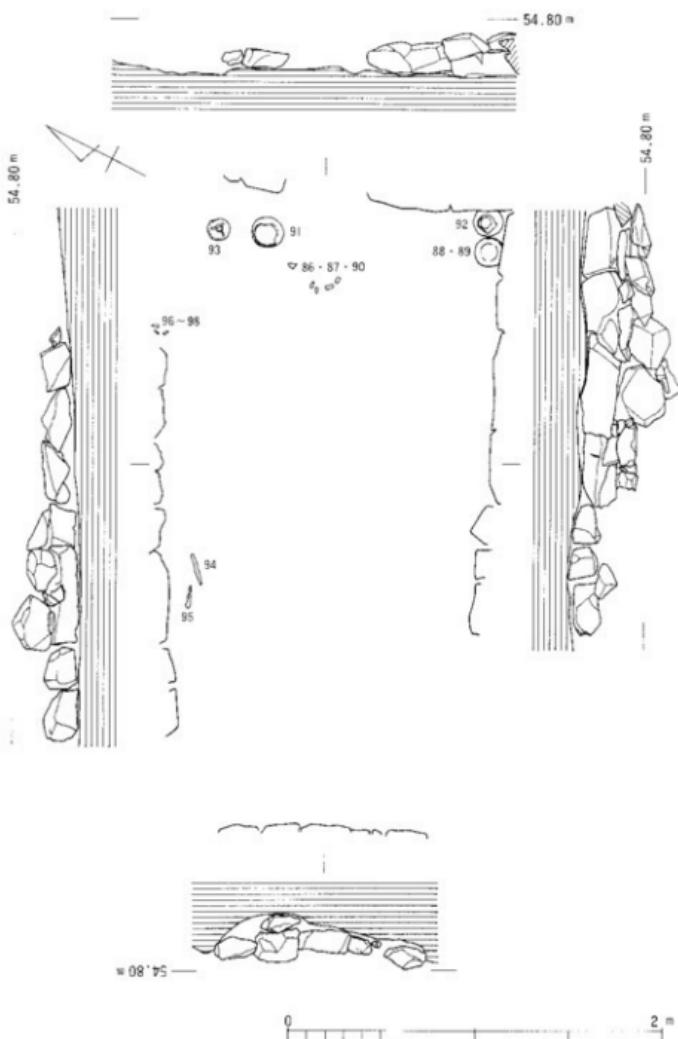


図-26 A 主体部展開・遺物配置図

石室内出土の遺物

須恵器（図27）

蓋坏（86～89） 出土した4点のうち、蓋3点、身が1点である。蓋88と身89はセットの状態で出土した。蓋はいずれも天井部と口縁部の境に稜を持つが、さほど鋭いものではない。口径は86で14.3cm、87が15cm、88で14.7cm、器高は順に5cm、4.7cm、4.9cmである。88の口縁部は斜めの非常にしっかりとした面を持つが、86・87では鈍い段のようになっており、86では部分的に沈線状になっている。天井部ヘラ削りの範囲はかなり広く、いずれの個体も縦に

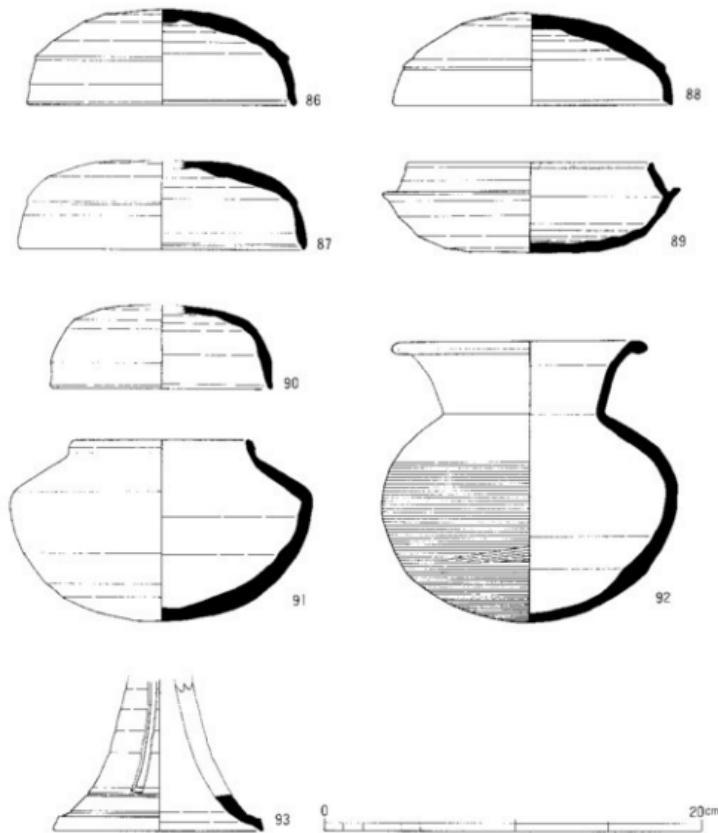


図-27 A主体部出土須恵器

近いところまで削られている。轆轤は86・88が時計方向、87が逆時計回りである。

蓋88とセットの状態で出土した身89は器高4.8cm、口径12.9cmを測る。内傾する口縁部は比較的長く口端部はしっかりとした面をなすが、この口端面には横撫でによる沈線状の段がみられる。時計方向の轆轤回転によるヘラ削りは体部の2/3程度の部分に施されている。また、88と同様の灰白色に焼成されている。

蓋(90) 梓を伏せたような形の蓋片で、若干の焼け歪みがみられるが、ほぼ口径11.7cm、器高4.5cmに復元され得る。天井部のみに回転ヘラ削りがみられ、他の部位はすべて横撫でされている。

短頸壺(91) 半球形の体部から強く屈曲した肩部、直立する短い口縁部を持つ有蓋短頸壺である。器高9.6cm、口径9.2cm、体部最大径15.8cmを測る。肩部を3cm下ったあたりまで逆時計方向の回転ヘラ削りを施されている。口縁部の周縁に径12.3cmの蓋の痕跡がみられる。胎土には、2~4mm大から大きなものでは小指先大の長石粒を含んでいる。

広口壺(92) 玄室奥壁部南隅で蓋環のセットとともに正立した状態で出土した壺で、口縁部を一部欠いている。器高14.9cm、口径13.5cm、体部最大径15.5cmを測る。偏球形の体部には底部からその3/4の部分に逆時計回りの搔き目を施されている。最大径部より3cmほど

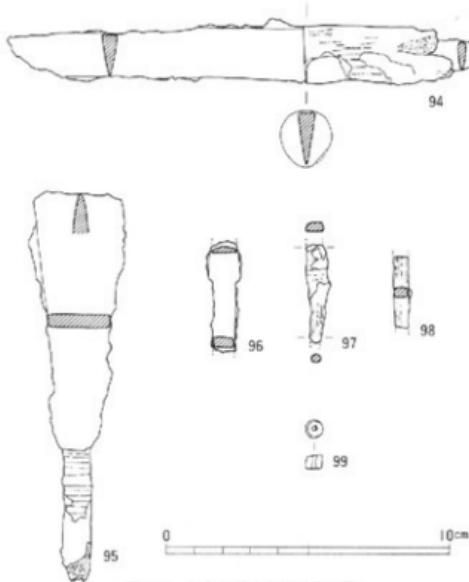


図-28 A主体部出土鉄製品・玉

下った位置に底部との接合痕が特に外面から良く観察できる。底部内面は指による綿撫で、その他の搔き目以外の部分は横撫で調整されている。

高坏（93） 脚裾径11.1cmを測る高环脚部片で、3方向に透かしを持つ。脚端面は外下方に若干傾いた面をなす。透かしの下方に2条の凹線が巡る。

鉄製品（図28）

刀子（94） 鹿角表の刀子、茎端部を欠くがほぼ完形に近く、推定全長16.7cm程度になるものと思われる。刀身部長10.4cm、最大幅1.8cm、厚さ0.5cmを測る。

鉄鎌（95～98） 鑿頭鎌95は僅かに茎端部を欠損しているが、遺存状況は非常に良好である。茎には矢柄の木質と、さらにこれを巻く樹皮とが残っている。現況長13.4cm、重量39gを測る。96は柳葉鎌の鎌身部片、97・98は尖根鎌の茎部片で、97にも矢柄の木質と樹皮の残存がみられる。

玉（図28-99） 下類としてはただ1点のみの出土である滑石製臼下、直径6.2mm、長さ4.7mmで、径1mmの孔は両面より穿たれています。

試掘調査出土の須恵器（図29）

試掘調査時に設定したトレントT-22は、結果的にこのA主体部のはば中軸線上を縱断す

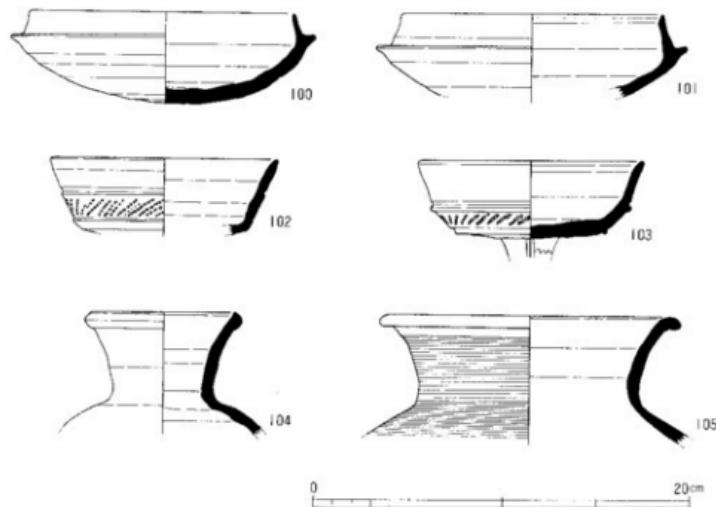


図-29 試掘調査出土須恵器

るかたちで掘削されたことになった。この時点で検出された集石はA主体部の落ち込み石であることがわかっている。この落ち込み石とともに採集された須恵器類は本来このA主体部に伴っている可能性が高く、実際石室内出土の須恵器との破片の接合例もある。したがって、これらの遺物を石室内出土遺物に準じるものとして、ここで扱っておく。

坏（100・101） 100は器高4.7cm、口径14.1cm、破片101の復元口径が13.8cmである。100の口縁部が比較的短く華奢であるのに比べて、101は長く立ち上っている。体部のヘラ削りは100では底部から体部の3/4の範囲を、101は破片であるが100と同程度の部分まで削られ、その後横撫されている。両者ともに體轍は時計方向に回っている。

高坏（102・103） 無蓋高坏の坏部片2点である。102で口径12.1cm、103で11.9cmを測る。両者ともに坏体部下位に2条の稜線を持ち、この稜線間を櫛齒状工具による右上がりの刺突列点文で埋めている。102に比べて103の棱は鋭く、高い。103に僅かに遺存する脚部には、対向する2方向に透かしが施されている。

提瓶（104） 復元口径7.7cmを測る口頭部片が出土している。肩部に僅かにみられる削りは、水平方向ではなく正面からみて体部を円形に巡る方向に施されており、提瓶の口頭部と思われる。

広口壺（105） 復元口径16cmを測る壺口頭部片、頭部から肩部には搔き目がみられる。胎土には長石粒を多く含んでいる。

（3）B主体部

石室（図30・31）

A主体部の南2mの位置で並んで検出された小石室で、床面を除いてほとんど全壇に近い遺存状況であった。南西コーナー部の5個の石材と北側壁の1個の石材を残すのみである。床面の遺存は良好で、2~5cm程度の河原石を敷いた礎床となっており、この床面と根石の抜き痕から2×0.8mの長方形プランであったことがわかる。主軸方位はN68°08'10"Eを測る。墓壇はA主体部と同様、その北東部で弥生時代の包含層を切って掘り込まれている。本米石室形態にあわせて、3.5×2m程度の隅丸長方形状に掘られていたものと考えられるが、基底面近くになってその形は崩れ、部分的に腰石の形状にあわせて掘った様子が窺える。小豎穴石室として扱っているが、西側小口部の掘り方に余裕があり、判然とはしないが石の抜き痕ともとれる僅かな溝みがみられ、西方向に開口する豎穴系横口式石室であった可能性がある。

石室内出土の玉類（図32・33-106~248）

石室内では凶化不能な須恵器小片1点と、玉類が出土している。被葬者は頭部を東に向けて安置されたものと思われ、玉類は東側小口壁直近の部分から60cmの間に集中して検出され

調査の成果

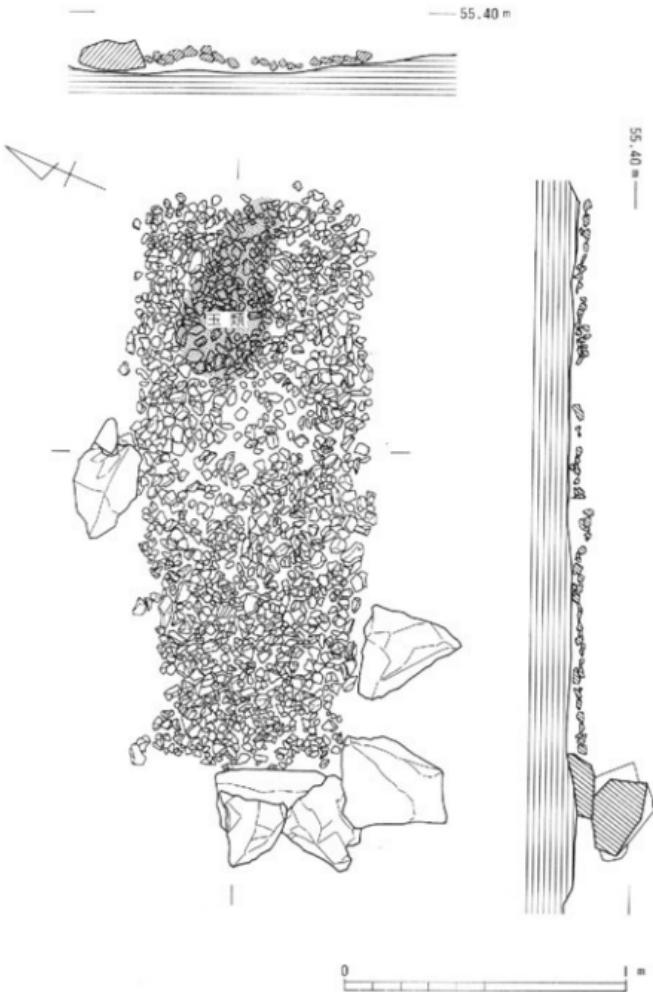


図-30 B主体部礎床と玉類の出土位置



図-31 B 主体部平面・展開図

た。106~236の131点は土製丸玉、237~240がガラス小玉、241の1点は銅製小玉で、242~248は碧玉製管玉である。土製丸玉はすべて黒色、ガラス小玉は濃紺色、銅製のものは銹化が著しい。管玉にはそれぞれ長さに長短はあるが、直径5mm以下の細いものとこれを越える太いも

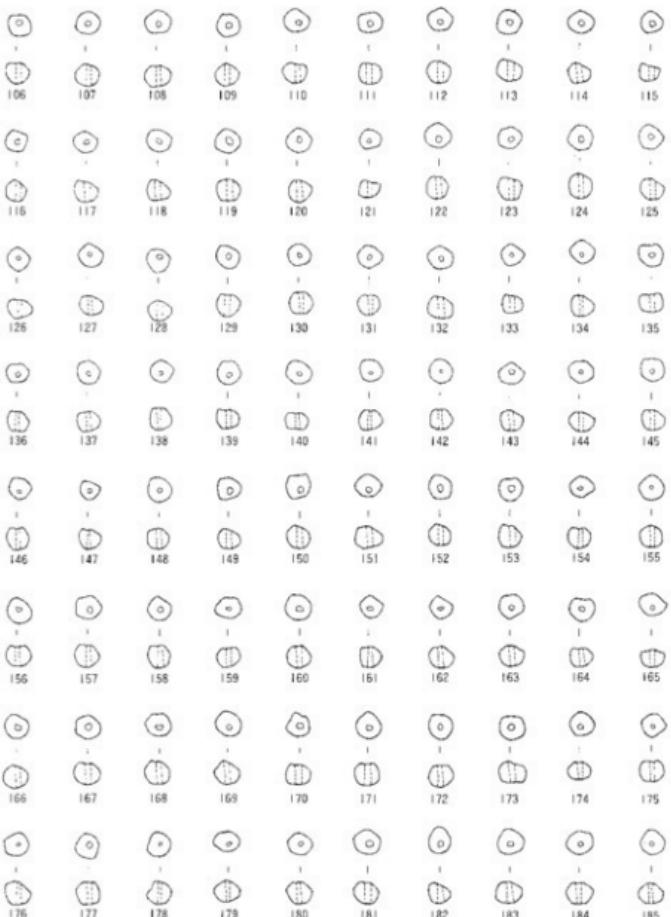


図-32 B主体部出土玉類(1)



のがあり、径の細いものは両面から、太いものは片面からの穿孔が行われている。

(4) 箱式石棺

A主体開口部の西方2.5mで検出された箱式石棺で、主軸方位はN19°30'10" W、A主体主軸の延長線上にあって、これを直交して切るような位置関係になる。天井石は1枚を除いてすべて失われている。壁石材、天井石材とともに板状の石を用いるのではなく、A・B主体と

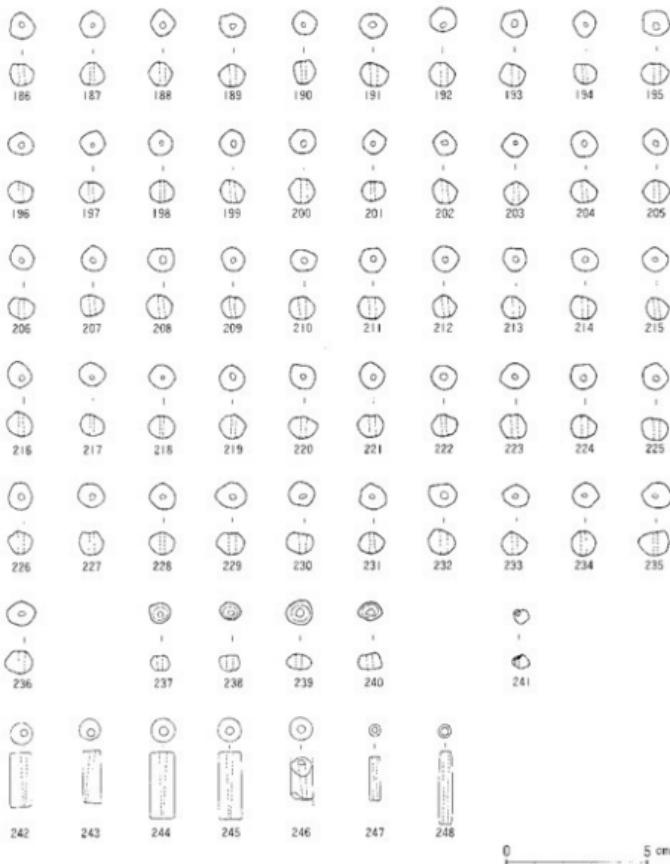


図-33 B主体部出土玉類(2)

同様のアブライト質の割石・塊石を用いている。非常に粗雑な構築で、残存する1枚の天井石もかろうじて側壁上に載る程度の長さしかなく、片側は既に石室内に落ち込んでいた。長さ1.5m、幅0.4m、高さ0.2~0.3mを測る。掘り方には余裕がなく、長方形の墓壙の四周の

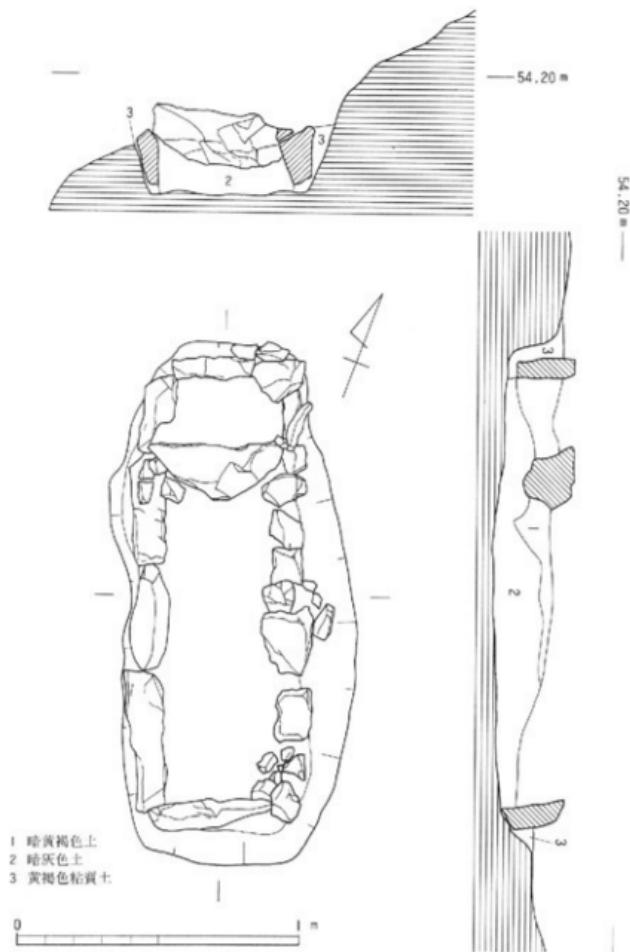


図-34 2号墳箱式石棺

壁に石を貼り付けたといったほうがよいような構築となっている。床面施設は持たない。A主体部への進入を遮るような位置関係から、これらA・B両主体との同時期の築造は考え難いが、遺物の出土はなく、時期不詳の石棺である。

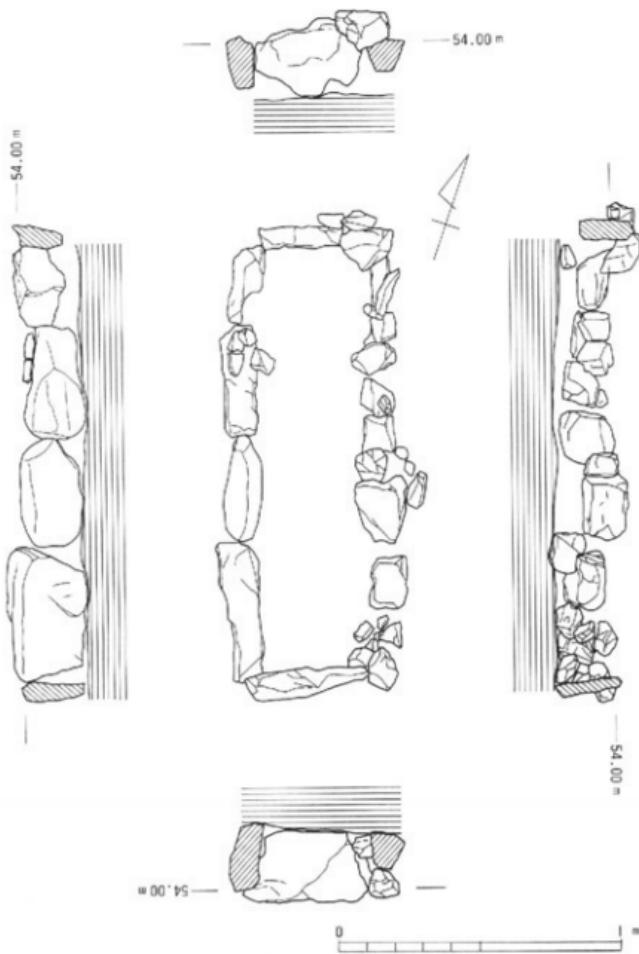


図-35 箱式石棺展開図

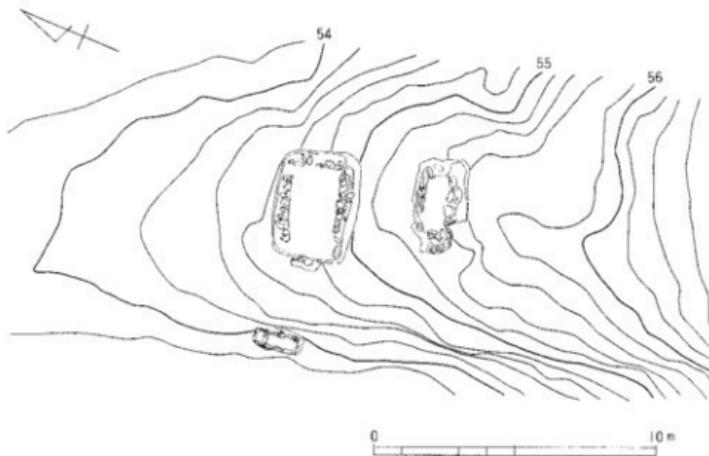


図-36 調査後の2号墳丘

(5) 弥生時代の遺物

2号墳A・B両主体部の東側には弥生時代の遺物を包含する黄褐色砂質土が残存しており、A主体部墓壇の南東隅部、B主体部墓壇の東辺部はこの弥生包含層を切って掘り込まれている。この弥生包含層より若干の弥生時代中期中葉の遺物が出土している。

弥生土器（図36）

壺（249・250） 249は復元口径13.3cmを測る口頭部片で、頸部に断面三角形の突帯を一条持つ。口端部は内外面に僅かに肥厚し、端面に2条の凹線を施される。外面の調整は器表面の摩減のためさだかでないが、口縁部の周縁は横撫でされていることがわかる。内面の頸部以下部分は横方向に磨かれ、以上は横撫でされている。250も器表面が二次的に火熱を受けたように非常に荒れており、調整等は不明である。

甕（251） 口頭部の小片で、頸部屈曲部の外面に压痕文突帯を持つ。口端部は上方へ摘み上げるように横撫でされている。

石器（図37）

石斧（252） 長さ16.9cm、最大幅4.6cm、最大厚2.5cm、重量385gを測る方柱状の片刃石斧で、この種の石斧としては大型のものである。緑色片岩を素材とし、各面とともに研磨されている。後主面には触れてみてそれとわかる程度の、極めて浅い抉り、というよりはむしろ擦みがあるが、この部分も磨かれている。



図-37 包含層出土陶器

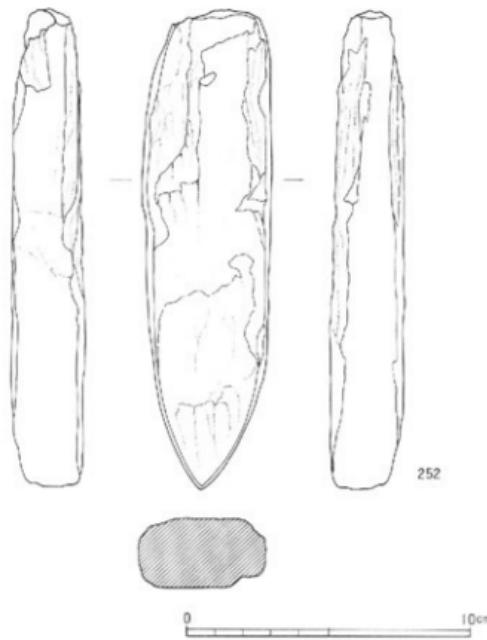


図-38 包含層出土石斧

4. 3号墳の調査

(1) 墳丘(図39・43)

3号墳は2号墳と同一丘陵上にあって、2号墳の南東40m、稜線沿いに2号墳をさらに約9m登った標高64mの地点に位置する。最高所で92.8mを測るE区丘陵の比較的急峻な稜線を北西方向に下って、いったん緩傾斜になる傾斜変換点にあたる部分である。試掘調査では表土直下で数個の塊石と、墓壙掘り形と考えられる掘り込みが検出されている。この3号墳においても、かなりな削平が行われ、墳丘封土の残存はみられなかった。また、2号墳と同様に墓壙は主体部北西部に部分的にみられる弥生時代の包含層を切って掘り込まれており、大規模な地山整形の痕跡は認められない。周溝も確認されておらず、墳形・規模ともに不明である。

(2) 横穴式石室と遺物の出土状況

主軸をN $47^{\circ}10'20''$ Eにとり、南西方向に開口する横穴式石室で、丘陵稜線に直交して築かれている。ほとんど全壙に近く、玄室部床面のみが残存している状態といってよい。壁体部分で残っているのは、南東側壁最奥部の腰石のみで、材質は花崗岩である。墓壙は2.7×

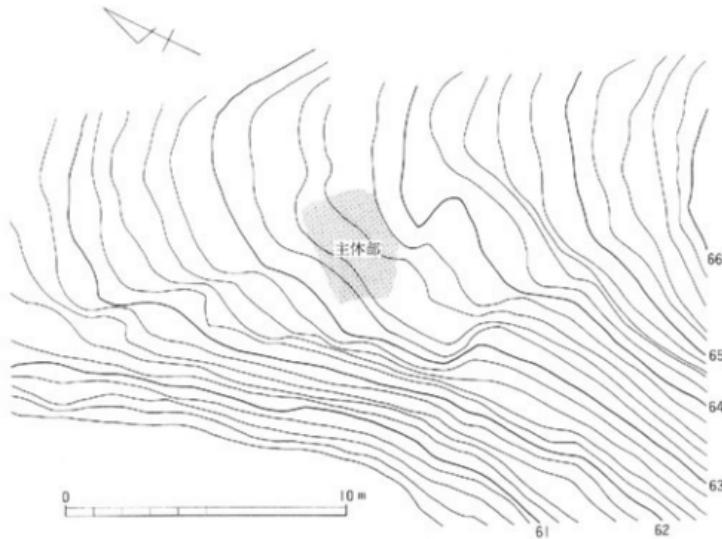


図-39 調査前の3号墳丘

3号墳の調査



図-40 3号墳石室と遺物の出土状況

4 m の隅丸長方形状に掘られ、この墓壙内に横穴式石室の玄室が築かれている。玄室規模は墓壙床面に残された難石の抜き取り痕によれば、長さ2.9m、幅1.3m程度の規模であったことがわかる。この石室も1号墳や2号墳A主体部と同様に、構築に際して平坦面が確保されているのは玄室部のみであって、これより入り口に近い部分は勾配の強い斜面にかかっており、狹道のような施設は持たなかつたものと考えられる。

玄室床面には20~30cm大の割石が敷きつめられているが、一部攪乱を受けている部分もある。石室の破壊状況や礫床の攪乱のわりには遺物の出土状態は良好で、玄室中央部から開口部寄りにかけて須恵器・耳環の出土がみられた。須恵器は玄室長軸に平行するように一列に並べられた状態で出土している。奥側より环身・短頭壺・环蓋の上に重なった状態の身・环身・壺片である。また、耳環は玄室中央部・短軸上の2地点でそれぞれ2個ずつが一対となつて出土した。なお、奥壁付近で落ち込み石とともに床面から遊離した状態ではあるが、短頭壺片の出土もみられている。

(3) 石室内出土の遺物

須恵器(図41)

蓋壺(253~256) 蓋1点、身3点の出土がある。蓋253の器高は4.3cm、口径11.9cmである。口縁部の直上に鈍く屈曲した稜がある。天井部はヘラ切り未調整、その他の部分はすべて横撫でされている。柄輪回転は逆時計方向である。身3点の法量はほぼ似通っているが、口縁部立ち上がりが短い254・255、これらに比べて若干長めの256の2種類がある。口縁部の短い2点ともに器高3.8cm、口径は254で11.2cm、255で10.3cmを測る。底部は切り離しの後撫でられており、切り離し痕はみられない。両者ともに糖輪は時計方向に回っている。253の焼成は非常に甘く、乳白色の色調を呈している。256は器高4cm、口径11.4cm、前2者と同様切り離しの後底部を撫でられており、糖輪回転も時計方向である。底部から体部に流れる自然釉がかかっており、倒立した状態で焼成されたことがわかる。

短頭壺(257・258) 257は小型の完形品、器高8.8cm、口径6.2cm、体部最大径12.8cmを測る。短い口縁部は、直上に立ち上がっている。肩部に凹線が1条巡り、底部と体部の接合部を強く横撫でするため、凹線状の窪みが巡っている。底部外面のヘラ削りはこの接合部まで行われるが、その方向は逆時計方向である。258は他の須恵器とは異なり、奥壁付近で落ち込み石とともに散乱して検出されたもので、口径8.9cm、体部最大径18.4cmを測る。この個体もやはり肩部に1条の凹線を施している。

壺(259) 底部から体部下半の片で、長頸壺になるものと思われる。肩部に2条の凹線と、この凹線間に刺突列点文が施されている。底部外面には搔き目がみられ、また肩部の外面と底部内面に自然釉がかかっている。

耳環(図42-260~263) 4個体のうち2個体ずつがセットの状態で出土している。260・

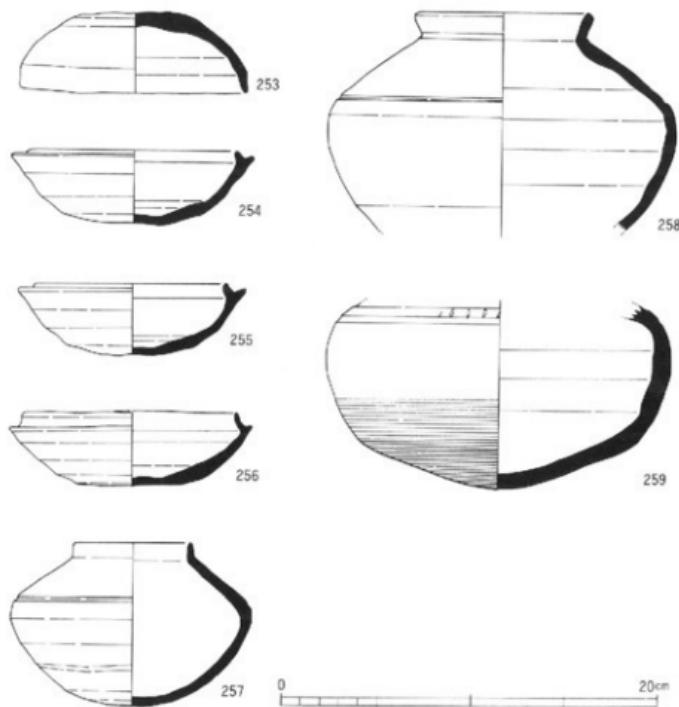


図-41 3号墳石室内出土須恵器

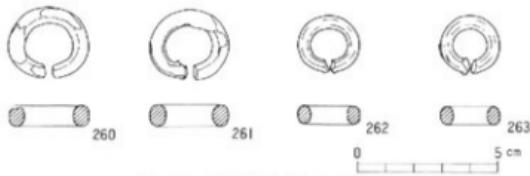


図-42 3号墳石室内出土耳環

261と262・263の2セットである。前者は奥壁側からみて中軸線よりもやや左寄り、後者は右側壁直近にあって、両者ともに玄室長軸方向のはば中央部に位置する。外径で前者は長径2.8cm、短径2.5cm程度の近似した法量、後者もまた長径2.2cm、短径2cm程度の似た値を示している。すべて銅芯に鍍金を施されたもので、遺存状況は後者2点のほうが良好である。

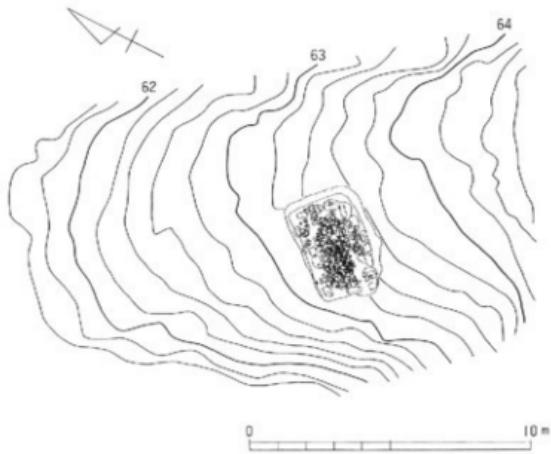


図-43 調査後の3号墳丘

(4) 包含層出土の弥生土器 (図44)

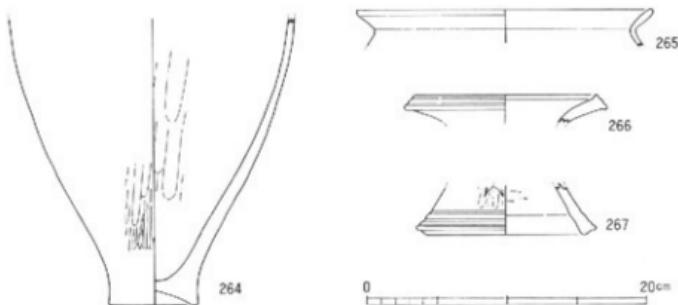


図-44 包含層出土弥生土器

先述したように、3号墳の墓壇は斜面下方部、つまり主体部南西部から西部にかけては弥生時代中期後葉から後期初頭の包含層である黒褐色シルトを切って埋り込まれている。ここでは、調査中に出土したこの包含層遺物をあげておく。

甕(264・265) 264は大型甕の下半部で、くびれの上げ底を持つものであるが、くびれそのものは小さく、底部も低い。底部周縁の内外面は横撫で、胴部の外面下半部には縦方向の

ヘラ磨きが施される。胴部内面は縱方向に撫でられている。他の3点の遺物に比べてより後期的な様相が強い。265は甕口縁部の片、復元口径21.2cmを測る。口端部は丸く仕上げられているが、外面に僅かな稜を持つ。

竈（266） 口縁部の片、復元口径13.2cmを測る。口端部は内外面に肥厚し、拡張した端面に2条の凹線がめぐる。

高坏（267） 脚裾部の片、復元断径12.8cmを測る。裾部外面に3条、脚端面に1条の凹線が施され、矢羽根透かしの一部が確認できる。裾端部周縁の内外面は横撫で、その他の外面は縱ヘラ磨き、内面は横方向に削られている。

IV 影浦谷1号墳出土ガラスの分析

奈良国立文化財研究所 肥塚隆保

古代において、日本で出土するガラスは、すべて珪酸塩ガラスであり、組成上鉛シリカガラスと、アルカリ石灰シリカガラスに分類できる。

鉛ガラスは、 $PbO-SiO_2$ 系、 $PbO-BaO-SiO_2$ 系に分類でき、アルカリ石灰シリカガラスは、 K_2O-SiO_2 系、 $Na_2O-CaO-SiO_2$ 系（ソーダ石灰シリカガラス）に分類できる。ソーダ石灰シリカガラスには、 Al_2O_3 成分の多いものと少ないものに分類できることが、従来の研究から明らかにされている〔山崎（1987）、肥塚（1993）〕。

今回分析した試料はいずれもソーダ石灰シリカガラスで、試料No.54・55を除く5点は、いずれも Al_2O_3 成分の多い特徴を有することが判明した。

また、弥生時代・古墳時代前期までは、ガラスの色調は限られたものであったが、5世紀後半～6世紀前半から、その色調が多様化しており、今回出土したガラスのように黄色系、黄緑系、（赤色系）などが出現する。もちろん、これに伴いガラスの製作にも新しい技法や材料などが導入されたものと考えられるが、その詳細については研究中である。

今回の分析試料のように、 PbO 、 SnO の含有量の差がいかなる目的達成のためなされたのかなどについては、今後、検討を要する問題である。

今回の試料のなかで、用途不明の管状ガラスを引きのばしたガラス片は、当時の組成と同様の組成を示しており、古墳時代の遺物と考えてさしつかえないが、考古学的な検討を要することはいうまでもない。

文献

山崎一雄 「日本出土のガラスの科学的研究」『古文化財の科学』思文閣出版 1987

肥塚隆保 「保存科学的方法による古代珪酸塩ガラスの研究Ⅰ」『奈良国立文化財研究所40周年記念論文集』 1993 投稿中

影浦谷1号墳出土ガラス分析値一覧表

(重量パーセント)

No 成分	No.27	No.29	No.34	No.36	No.54	No.55	No.56
S i O ₂	52.1	50.2	52.2	51.8	65.0	63.7	66.3
A l ₂ O ₃	12.0	12.3	13.7	13.7	3.4	3.8	13.5
N a ₂ O	18.8	17.7	16.1	19.4	16.7	17.4	14.0
K ₂ O	3.4	5.0	3.6	4.5	4.7	3.4	2.0
M g O	0.2	0.3	0.4	0.2	3.3	4.2	0.1
C a O	6.7	5.5	7.1	4.6	5.0	4.2	2.4
T i O ₂	0.5	0.6	0.8	1.1	0.1	0.7	—
F e ₂ O ₃	2.6	1.9	2.5	1.6	1.3	1.8	0.1
C u O	0.5	0.004	0.6	1.0	0.08	0.1	0.3
C o O	—	—	—	—	0.06	0.1	—
P b O	2.0	4.6	1.9	1.2	0.06	0.06	1.3
S n O	0.7	1.6	0.6	0.6	—	—	—
A g ₂ O	—	—	—	—	—	—	0.01
色調	黄緑	黄	薄青	紺緑	紺	紺	薄青

※分析は、微小領域エネルギー分散型蛍光X線分析装置により行い、定量値の算出にはFP法によったので、数値は半定見的なものとして解釈されたい。

V まとめ

今回調査が行われた、山越・姫原地区の丘陵部は松山市により「姫原古墳群」として指定された周知の包蔵地にはあたっているものの、この地域内における古墳の発掘調査は未だかつて行われたことがなく、初例といってよい本調査によって、この古墳群の実態の一端が明らかになった。ここでは、調査された3基の後期古墳の築造年代、特徴についてまとめておく。

1号墳では、石室内外を問わず土器類の出土が少なく、墳丘裾部出土の埴輪を含めてもなお大雜把な時期比定しかできない。まず、1次埋葬面である礎床面での上器出土は須恵器小片数点に限られ、この面の時期を石室内の土器によって知ることはできないが、墳丘裾部出土の埴輪は、築造時のものと推定される。これらの円筒埴輪は、川西編年に従えば最下段タガに断続ナデ技法を欠くものの、Ⅷ期の新しいところに位置づけられる。盾形埴輪もその前面になんらの意匠を持たず、この種の埴輪の最終末のものと考えてよい。また、これらの埴輪と共に出土した1点の环身片は田辺編年のTK-43、もしくはTK-209の時期を示しており、埴輪の年代と齟齬をきたさず、6世紀後葉～末の間におさまる。

石室内出土の有蓋短頭壺は、1次埋葬の次の段階、つまり粘土床を貼る段階で埋め込まれたものである。このことは、いわば粘土にサンドイッチにされたような出土状態からわかる。ただし、粘土を貼る段階で、もともと礎床面にあったものを埋めたのか、それとも外部から新たに持ち込んだものなのかはわからない。この短頭壺も先ほどの埴輪や环とそれほどの時期差は認められず、また、粘土床面で出土した壺口縁部片も細かい時期を云々するには、いかにも苦しいが、いずれにしても、1次埋葬から短期間のうちに粘土床が貼られたものには違いなかろう。

さて、前章でも述べたように、この粘土床面での遺物の出土は壺口縁部片を除いてほとんど皆無に等しく、埋葬の痕跡のようなものはみられない。また、追葬に際して粘土を貼り、この面を追葬面として用いる例は、当平野のみならず、愛媛県内でも知られておらず、ここでは客観的な事実として礎床面での埋葬の後、約20cmの厚さで粘土が床面全体に貼られていることのみを報告しておく。

1号墳は、半壇状態の玄室のみの遺存であったが、その規模は床面で長さ4.4m、最大幅2.5mと当平野では最大の部類に属する玄室規模である。いま、この規模に匹敵する横穴式石室を平野内で拾ってみると、平野北東部の北谷古墳・塚本1号墳、北西部の鶴が峰H区7号墳、中央部の東山窓が森4号墳A石室・6号墳・8号墳A石室、南部の塙塚古墳等が挙げられるが、これらの石室は大型石材を用いた両袖型横穴式石室で、概ね7世紀初頭以降のものである。北谷古墳は6世紀末の年代を与えられているが、出土遺物による時期比定ではなく、不

確定要素が強い。これらの石室に比べると、1号墳は小ぶりの塊石による構築、少なくとも基底面には明確な袖の痕跡を残さないプランというように、あきらかに構築方法が異なっており、この段階には叢内型石室の影響を受けた大型石材による横穴式石室の導入はなかったものと推察される。このことについては、松山平野南部における首長墓系譜を追う過程で石室構築法に触れた谷若倫郎氏によって既に指摘されている。

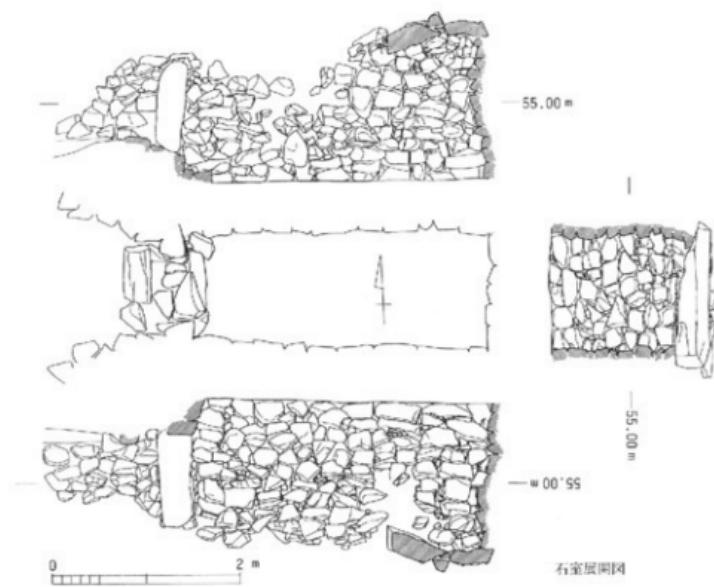
2号墳A主体部の出土遺物のうち、特に壺は概ねTK-10型式におさまるものが多いが、試掘調査出土の高壺を含めて、高壺は若干下る様相が強い。このことから6世紀中頃から後半の時期を考えておく。いずれにしても、1号墳に先行する時期の築造であろう。また、そのサイズは1号墳よりひとまわり小さくなるが、明確な渓道を持たない構造は、3号墳とともに今回調査された横穴式石室の共通する特徴である。

2号墳B主体部は、玉類がその出土遺物のほとんどすべてであり、観察すべき盛土の残存もないことから、A主体部と確實に同時期築造とはいいきれない部分もあるが、いかにも計画的に配置されたようなその検出位置から、同時期のものと推定しておく。

箱式石棺も無遺物で、時期は不詳である。A主体部への進入を妨げるような位置関係をもって、同時期構築のものとは考え難いと判断しているが、A主体部そのものが渓道といえるような施設をもたないこと、平面位置はA主体部と近接しているが、斜面下方に位置し、本来レベル的にA主体部の進入にかかわりのない位置であった可能性もある。B主体部を計画的な配置というならば、この石棺の配置にもある種計画性がみてとれないこともない。

3号墳は、1・2号墳よりもさらに下り、その須恵器はTK-217型式の古い段階に相当するものであり、7世紀の前半期に比定できる。

ところで、これらの横穴式石室のように、小ぶりの塊石でもって石室が構築され、明確な渓道を持たず、閉塞の補助的な役割をもった短い側壁が玄室にとりつくような石室は、当平野においては6世紀後半以降、玄室長2~3m、幅1~1.5m程度の小規模な石室に採用される例が多い。松山市東石井町所在の東山鷺が森2号墳、山西町所在の御産所權現山1号墳の2例が遺存状況の良好な例として挙げられる。ここで、最終的に石室を解体するところまで調査が行われた6世紀末の古墳、御産所權現山1号墳の例をみてみよう(図45)。石室は8枚の天井石のうち奥壁側の2枚のみが原位置に遺存、他は原位置を損なっていたが石室全体としては概ね良好な遺存状況であった。石室全長4.5m、玄室長3m、幅1.2m、高さ1.5m、玄門幅0.7mの両袖型横穴式石室である。墓壙は、玄室がおさまる範囲を掘り下げ、玄室への進入は段を降りる構造になっている。閉塞は玄門部で塊石積み上げによって行われ、このための補助的な役割を持つ側壁が、地山上ではなく盛土を施した上に長さ1.5mの「ハ」の字状に玄門部にとりつく。したがって、ある程度削平を受けてしまうと、この閉塞部分の痕跡は残らなくなってしまう。また、玄門を形成する袖石は階段状石積みの上に載せられており、玄室基底部には袖の張り出しの痕跡を残さない。東山鷺が森2号墳の場合、袖は持たないが、



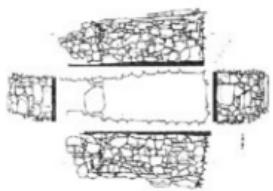
石室断面図



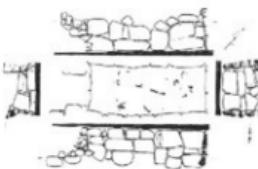
横穴式石室（西より）

基底石の状況

図-45 御産所權現山1号墳横穴式石室



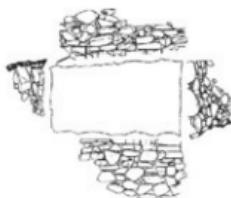
東山鶴が森2号墳(文献⑨より)



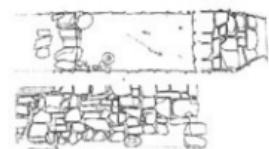
東山鶴が森4号墳B石室(文献⑨より)



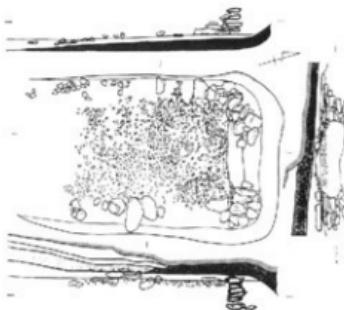
北谷王神ノ木1号墳(文献⑤より)



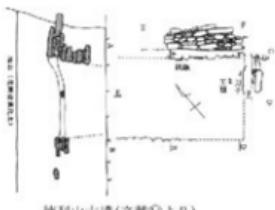
御産所11号墳(文献⑩より)



かいな二2号墳(文献⑪より)



齊院茶臼山古墳(文献⑫より)



徳利山古墳(文献⑬より)

0 4 m

図-46 松山平野の竪穴系横口石室

横口部に閉塞の補助的な短い壁がとりつき、段を降りて玄室へ進入するといった点でこれとよく似た構造になっている。この東山窓が森2号墳は柳沢一男氏によって、竪穴系横口式石室cタイプ、すなわち6世紀中葉以降の築造になる地方色を持った石室としてとりあげられ、東山窓が森古墳群中に数例みられる階段状石積みを有する石室の祖形として指摘された石室でもある。6世紀後半以降の竪穴系横口石室とみられる例は、この他にも東山窓が森4号墳B石室や、福角町北谷王神ノ木1号墳、山西町御産所11号墳、平井町かいなご2号墳などがある。なお、5世紀末の段階に不明確ではあるが、北部九州系の竪穴系横口石室ではないかと指摘されているものがある。北山町所在の徳利山古墳と、北斎院町茶臼山古墳がそれで、この2基は比較的偏平な削石積みで、それぞれ床面幅1.6m、2mとかなり幅広の玄室プランをなしている。

さて、本調査で検出された3基の横穴式石室のうち、2号墳A主体部は、玄室部分のみをおさめるように掘られた墓壙、段を介した玄室への進入、極めて短いと考えられる閉塞施設というように、上記諸例に共通する部分がある。その幅広のプランも、徳利山・茶臼山の系譜に乗せれば、削石積みから塊石積みへの変遷を含めて理解することができる。3号墳はほとんど玄室床面だけの遺存で、段を持つかどうかとも不明であるが、この石室の閉塞施設も極めて短いものであったことは推測できる。また、小竪穴石室としている2号墳B主体部にも上記諸例に似た構造を持っていた可能性がある。

1号墳については狭道のような施設を持たないことはあきらかで、この点で2・3号墳に共通した部分はあるが、稜線上の比較的良好な平坦面を避けるように斜面部に構築されたその占地みると、本文中で述べたような岩盤掘削の困難さを回避するためというように単純には片付けられない、「横」という発想を強く意識した占地のようにも考えられる。いずれにしても、この石室には不明な部分が多く、遺存状況の良好な類例を待たなければ、その全容はあきらかにはし難い。

文献――

- ①川西宏幸 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌64巻2号』日本考古学会 1978
- ②辻近昭三 『陶邑古廟址群』平安学園 1966
- ③ 『須恵器大成』角川書店 1981
- ④岡野 保 『北谷古墳(墳丘・石室実測調査報告書)』松山商科大学史跡研究会 1980
- ⑤栗田茂敏 『北谷王神ノ木古墳・塚本古墳』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター 1991
- ⑥ 『御産所椎現山遺跡』『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター 1991
- ⑦西尾幸則 『鵜が峰古墳群』『愛媛県史 資料編 古考』愛媛県教育委員会 1987

- ⑧ 「齊院茶臼山古墳」松山市教育委員会 1983
- ⑨ 西尾幸則・田辺昭三 「東山薙が森古墳群調査報告書」松山市教育委員会 1981
- ⑩ 谷若倫郎・須藤敦子 「上三谷古墳群Ⅰ」愛媛県埋蔵文化財調査センター 1987
- ⑪ 「上三谷古墳群Ⅱ」愛媛県埋蔵文化財調査センター 1988
- ⑫ 森 光晴 「かいなご・松ヶ谷古墳」松山市教育委員会 1975
- ⑬ 「御産所11号古墳・忽那山古墳・久万ノ台古墳」松山市教育委員会 1976
- ⑭ 「徳利山古墳」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県教育委員会 1987
- ⑮ 柳沢一男 「豎穴系横口式石室再考」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 1982
- ⑯ 「横穴式石室からみた地域開動向・近畿と九州」『横穴式石室を考える—近畿の横穴式石室とその系譜—』帝塚山考古学研究所 1990

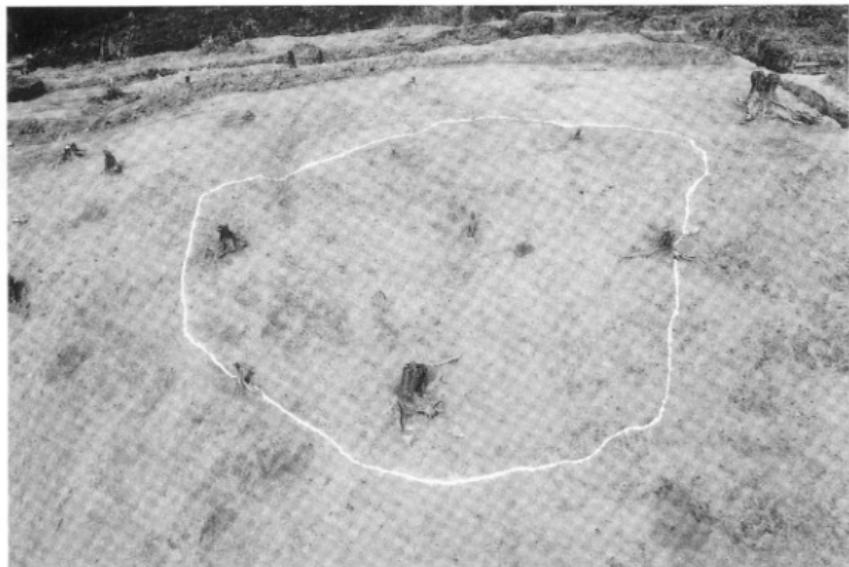
図版



A区丘陵 1号墳遠景（北東E区より）



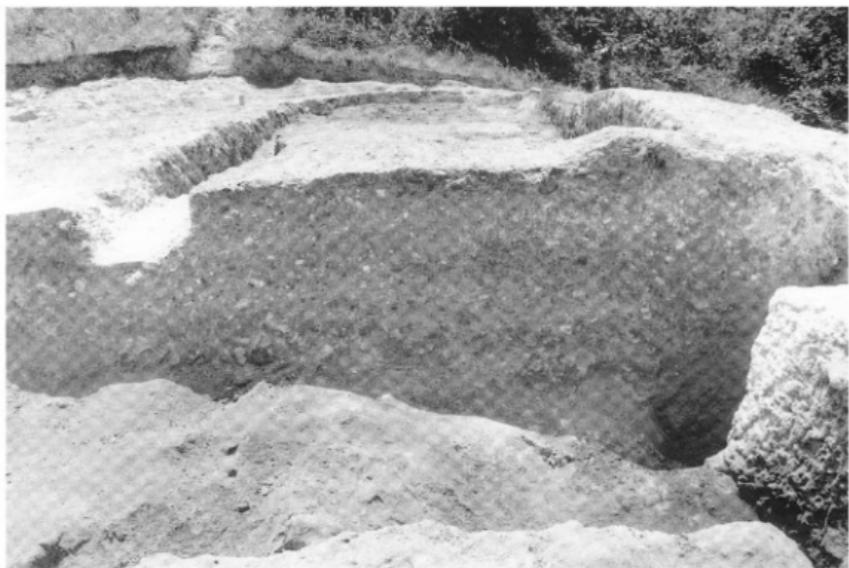
調査前 1号墳丘（北西より）



墳丘擾乱跡の検出（南西より）



擾乱跡の振り下げ（南西より）



主体部背後の封土の状況（北西より）



墳丘の断ち割り（北東より）



粘土床の検出（南西より）



粘土の被覆状況（東より）



種床面の検出(I) (南西より)



種床面の検出(II) (南西より)



礎床面の検出(3) (南より)



直刀出土状況



短頸壺出土状況(1)



短頸壺出土状況(2) (南西より)



石室完掘状況(1) (南西上方より)



石室完掘状況(2) (南西より)



奥壁の状況（南西より）



東西側壁の状況（南より）



北東側壁の状況（北西より）



S X-2 墓輪出土状況(I)（北東より）



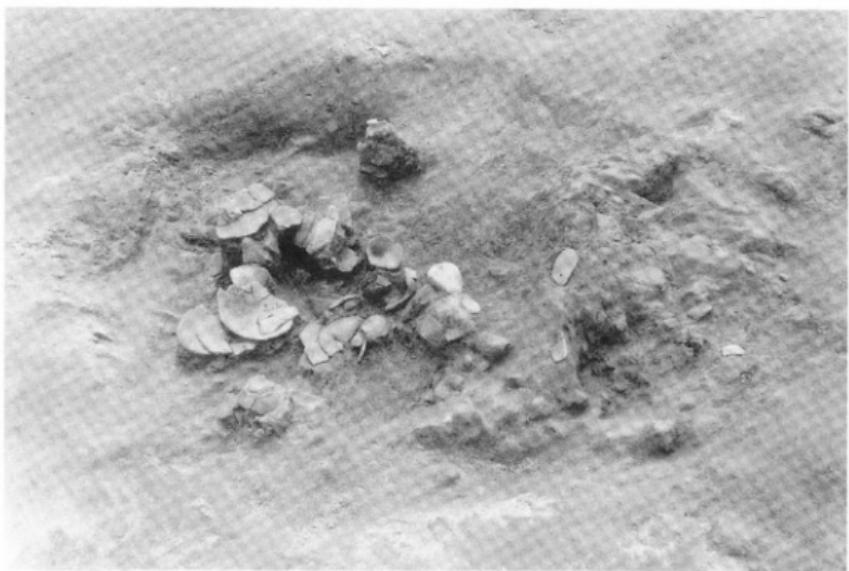
S X-2 墓輪出土状況(2) (北より)



S X-3 墓輪出土状況(1) (南東より)



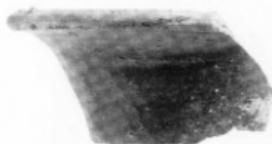
S X-3 墓軸出土状況(2) (東より)



弥生土壤 SK-1 遺物出土状況



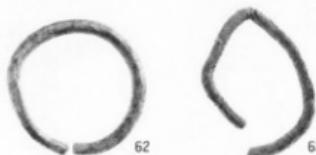
1



2



79



62

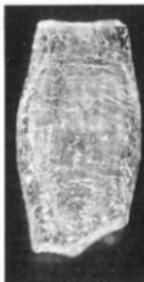


63

($\times 6$)



($\times 6$)



($\times 30$)



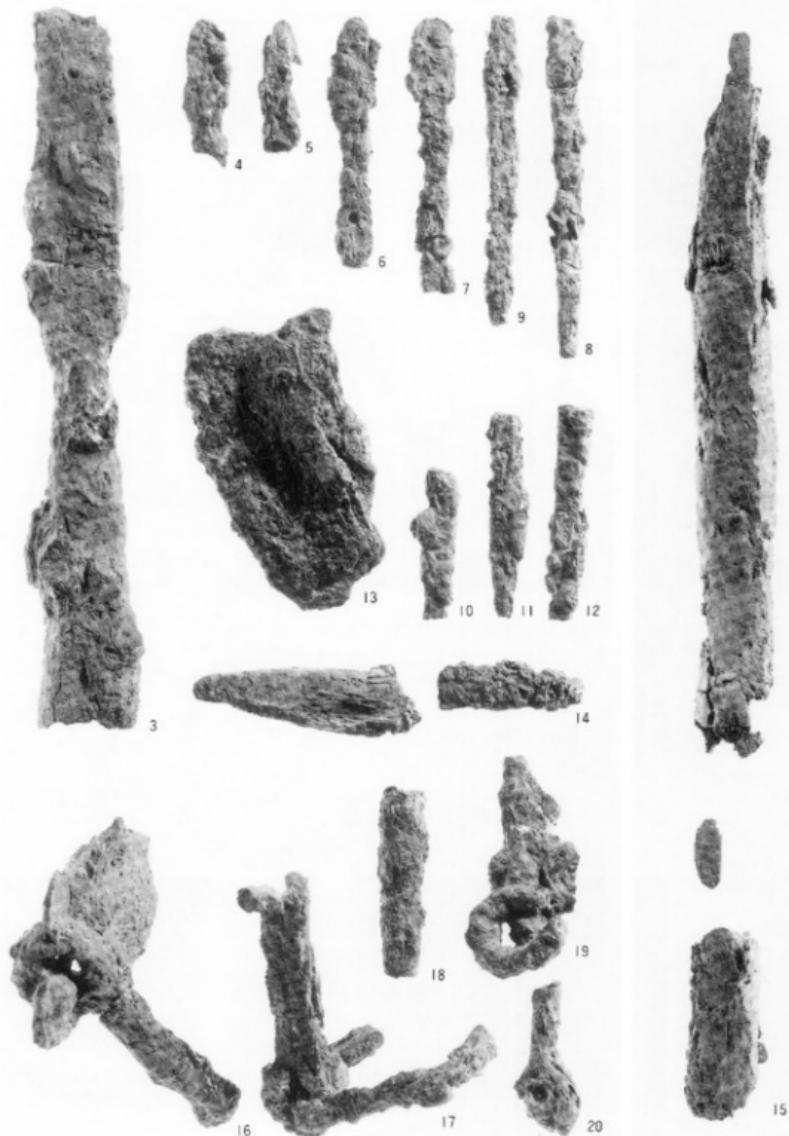
($\times 2$)



($\times 4$)



1号墳出土須恵器・装身具



1号墳出土鐵製品



65

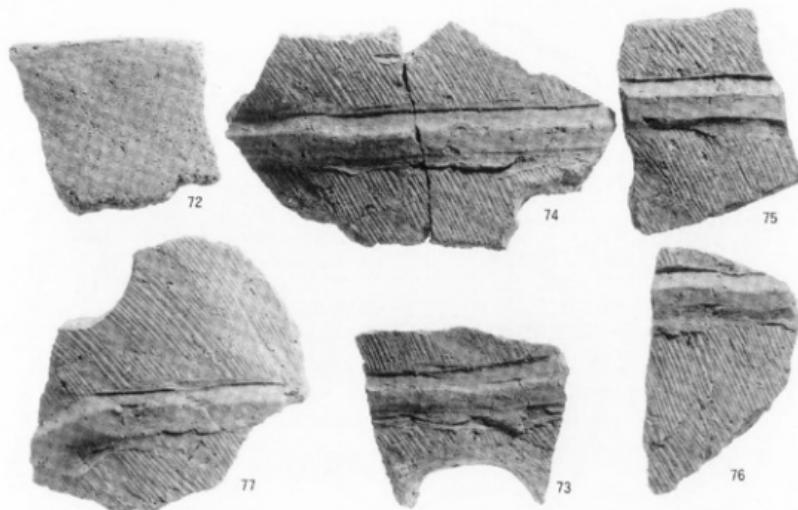
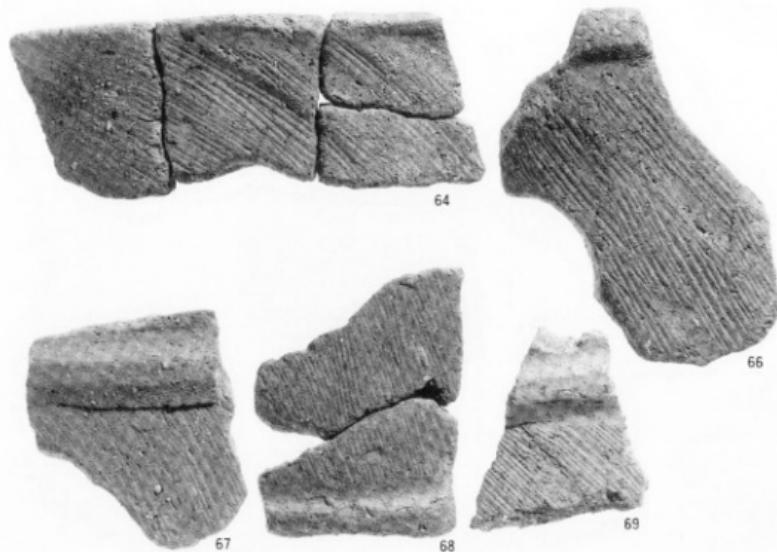


70

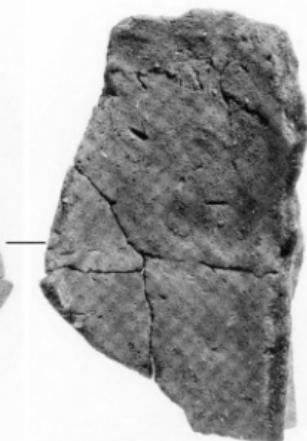


71

1 号墳出土円筒埴輪(1)



1号墳出土円筒埴輪(2)



78-c

78-e



78-g

78-b

78-a

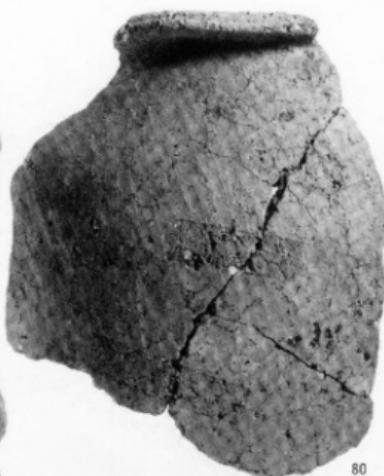
1号墳出土盾形埴輪(1)







81



85

80



83



82

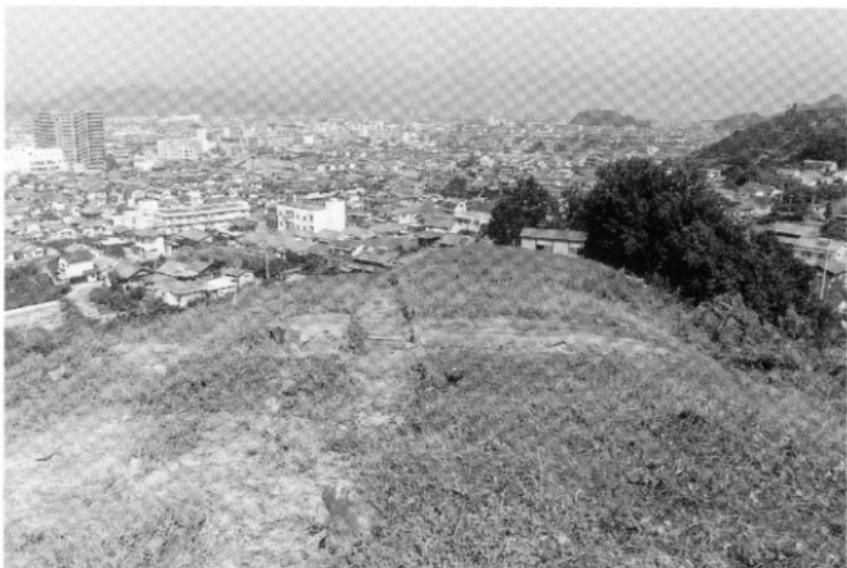


84

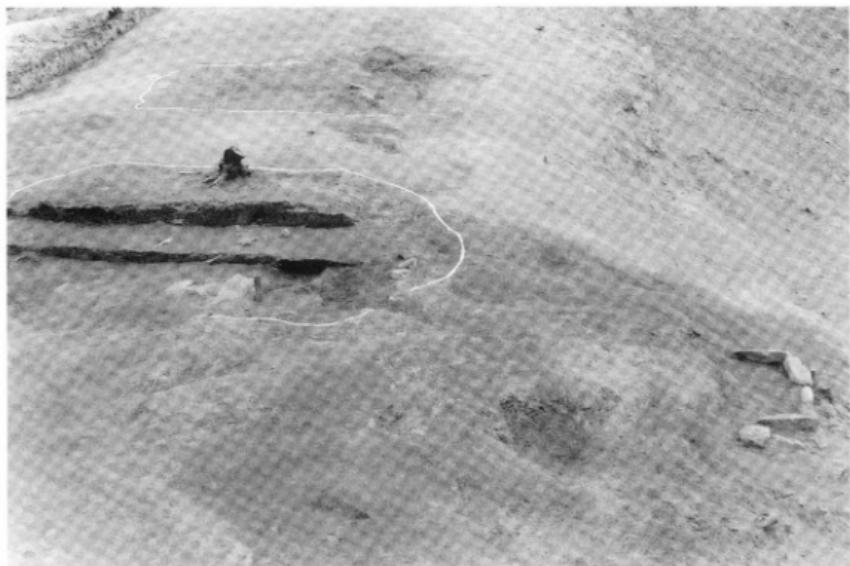
S K-1 出土遺物



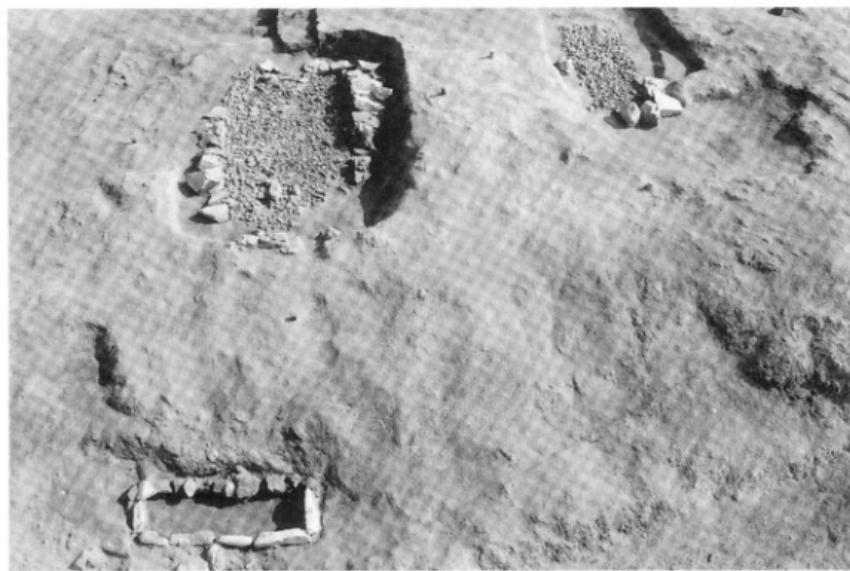
E区丘陵遠景（西より）



E区丘陵より北西方向を望む



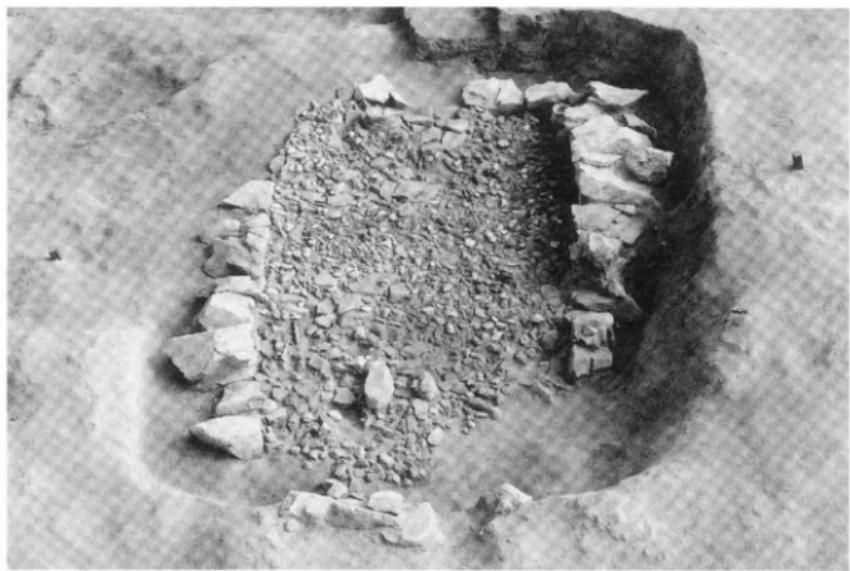
A・B主体部、箱式石棺の検出（北より）



石室・石棺の配置（西上方より）



A・B主体部の配置（西上方より）



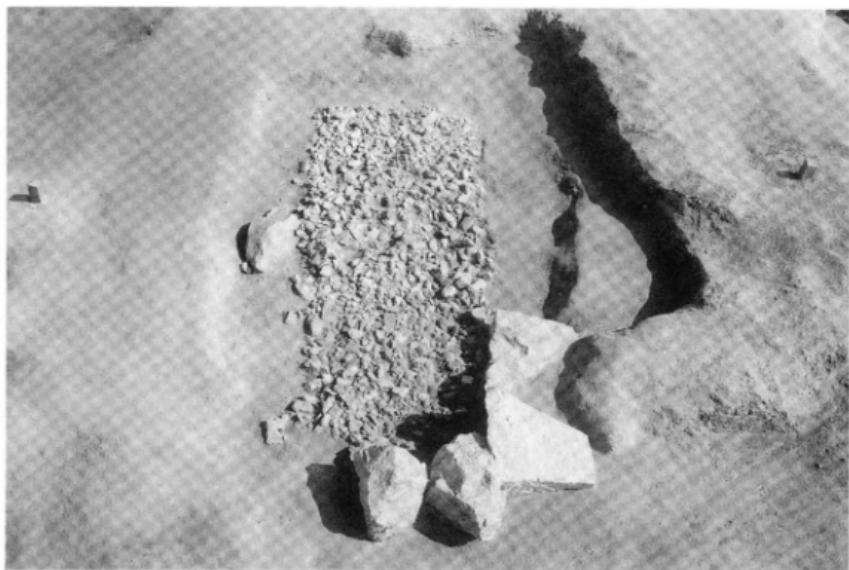
A主体部礎床面の検出（西より）



A 主体奥壁部の遺物出土状況(1) (北西より)



A 主体奥壁部の遺物出土状況(2) (北西より)



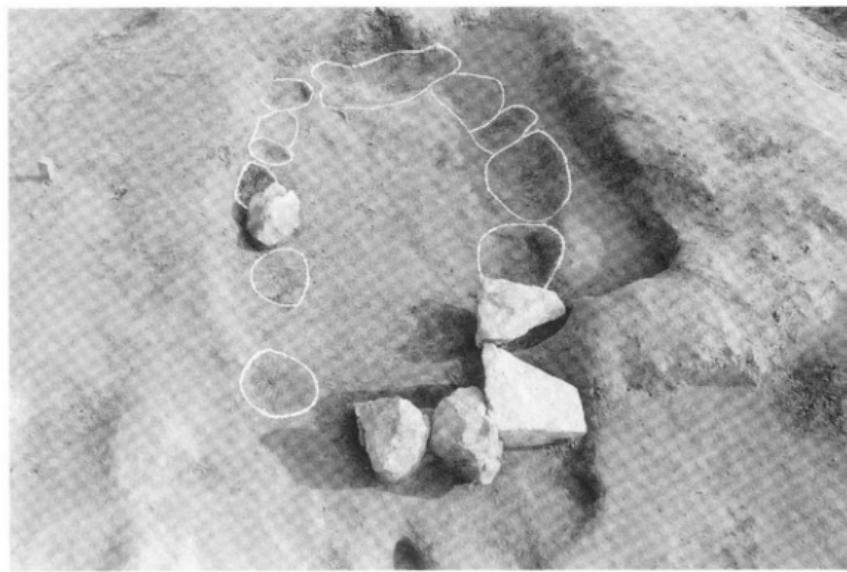
B 主体部礫床の検出（西より）



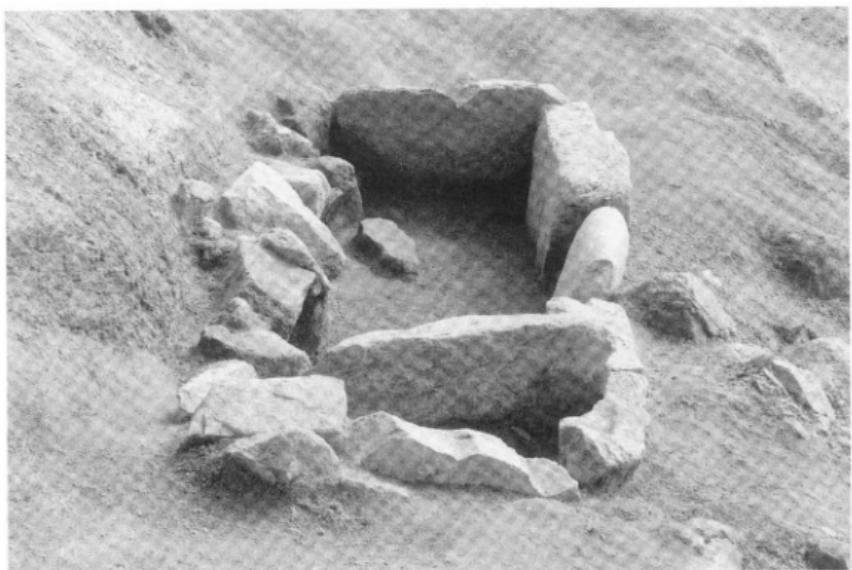
B 主体部玉類の出土状況(I)



B 主体部玉類の出土状況(2)



B 主体部完掘状況（西より）



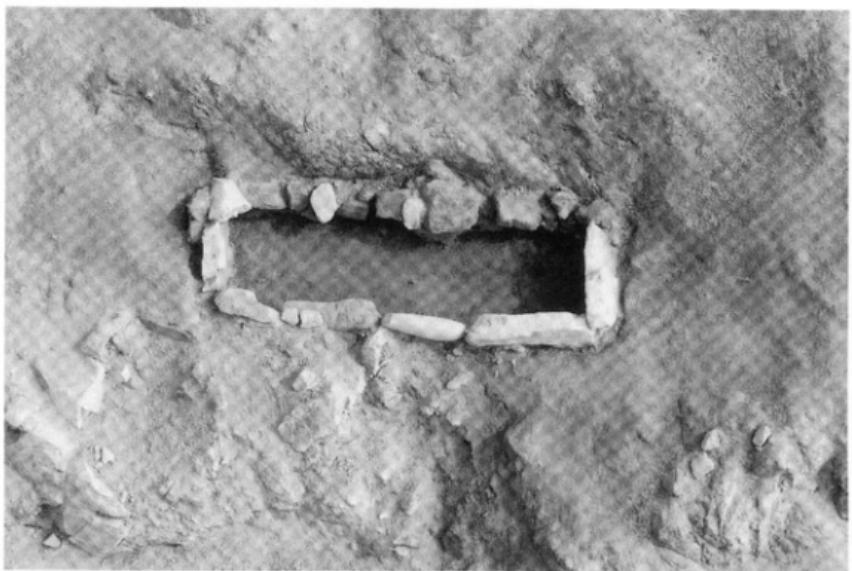
箱式石棺検出状況(1) (北より)



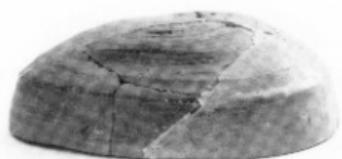
箱式石棺検出状況(2) (東より)



箱式石棺完描状況(1) (北より)



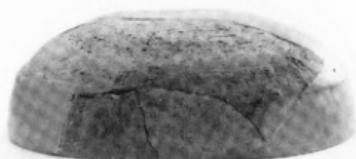
箱式石棺完描状況(2) (上空より)



86



88



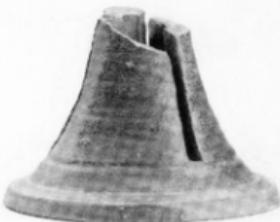
87



89



90



93



91



92

A主体部出土須恵器



103



100



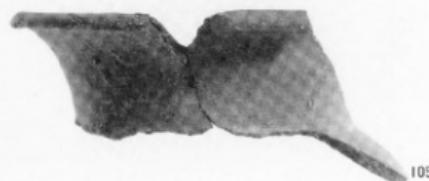
102



101



104



105



95



96



97

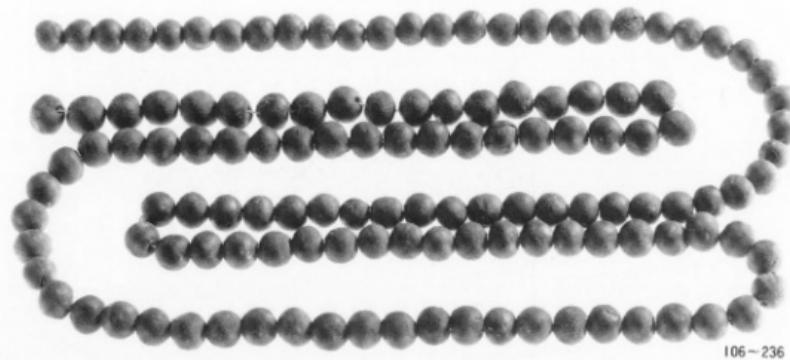


98



94

試掘調查出土須惠器、A 主体部出土鉄器・玉



B 主体部出土玉類



251

249



252

包含層出土弥生遺物



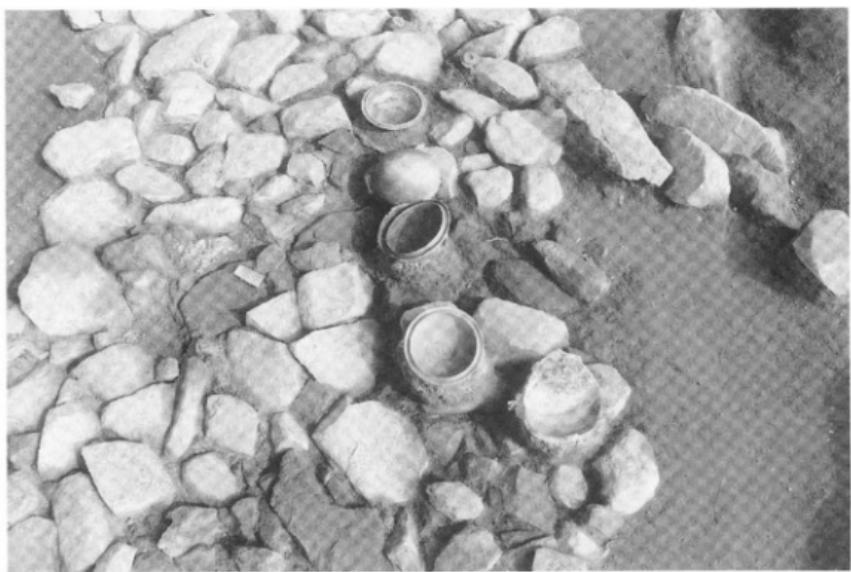
石室の検出（北西より）



石室床面の検出(I) (南西より)



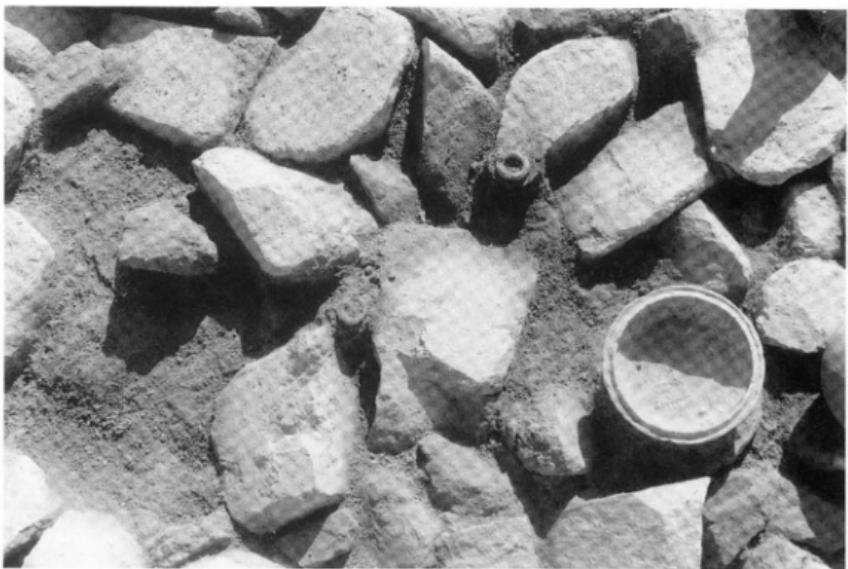
石室床面の検出(2) (北西より)



須恵器の出土状況(i)



須恵器の出土状況（北より）



耳環の出土状況



253



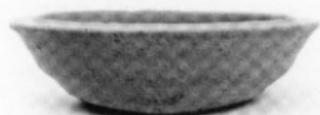
257



254



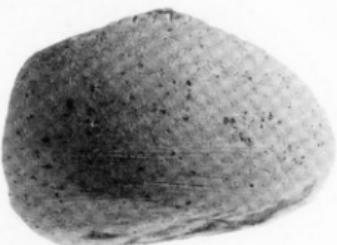
258



255



256



259

3 号墳石室内出土須恵器



260



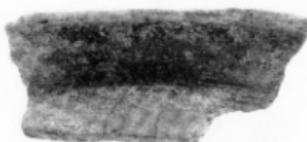
261



262



263



265

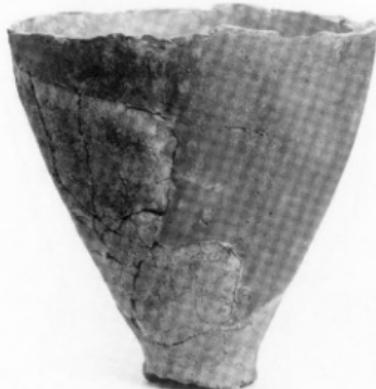


266



267

3号墳石室内出土耳環



264

包含層出土弥生土器

松山市文化財調査報告書 第33集

影浦谷古墳

平成5年3月31日 発行

編集 松山市教育委員会
発行 〒790 松山市二番町4丁目7-2
TEL (0899) 48-6605

財団法人 松山市生涯学習振興財團
埋蔵文化財センター
〒791 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (0899) 23-6363

印刷 原印刷株式会社
〒791 松山市山越4丁目8-15
TEL (0899) 24-8823
